

喜ぶる祭り…(説美スケセキ) 異邦の想は

R&V

12号

1994年

冬号 1月～3月



カトリック教会スクウェアにできた新しいモニュメント。後にマッターホルンが見える

幻想の世界（ルネサンス美術）…繁栄と衰退

山とは全く関係ないのですが、私は若い頃から山のほかに、美術鑑賞が好きでした。ラファエロ、レンブラント、ボッティチエリ等の絵を見ていると、心が洗われていく様な気がしました。この間もちょっととイライラする状態が続いたので、ルネサンス美術でも鑑賞したいな～と思いまして、一人フィレンツェに行きました。…（あくまでも夢の中での話ですけどね）…。

それでは、その時の事を簡単に話したいと思います…。ここフィレンツェには、今から500年程昔ルネサンスと呼ばれる大きな文化運動が花開きました。この町の中心には、一際大きいフィレンツェ大聖堂があります。様々な困難に打ち勝って大聖堂の巨大なドームが、完成したのは15世紀初期のことでした。古代ローマ以来千数百年ぶりにイタリヤの空に出現した大ドームは、ルネサンスの開幕を告げるシンボルとなっています。

そこでまず、大聖堂をまじかに望む、ウフィツィ美術館に行きました。（ウフィツィとはオフィス→事務所の事。この地方の行政事務所だった建物です。それが今は美術館になっています）この美術館は、ルネサンス美術の収集では世界最高の美術館です。（フィレンツェが、生み育てた芸術家たちの作品が中心となっています。）

まずは青年時代のレオナルド・ダ・ヴィンチの作品『受胎告知』。ミケランジェロの『聖家族』。ラファエロの『聖母子』。と見まして、そしてこのウフィツィ美術館で、最も充実しているといわれるサンドロ・ボッティチエリの部屋を、時間をかけて見ました。ここには、ボッティチエリの作品がズラリと並んでいます。

始めに、彼の聖母像の中でも最も美しいと言われる『マニフィカートの聖母』。このマニフィカートとは【救世主の母に選ばれた幸せを神に感謝するマリアの賛歌】だといわれています。そしてルネサンスの春を象徴する『ビーナスの誕生』…海の泡から生まれた古代の神“ビーナス”が春を告げる風の神ゼフィロスに吹かれてこの世に姿を表します…。これは（ボッティチエリは）是が非でも見たっかものでした。

ルネサンスとは古代の美が蘇った時代ですが、ボッティチエリはその代表的な作家であり古代の美を夢見た画家でした。（ボッティチエリとは、小さな酒樽と言うの意味のあだなで、本名はアレッサンドロ・フィリペイピ。）

ここで、当時のフィレンツェについて少し説明しますと、イタリアに数多い都市国家の中でフィレンツェの活動が、特に際立ったのは13世紀後半からのことでした。今も市内を飾る壮麗な建造物は、この頃以降建てた物が多いのです。15世紀になるとメディチ家が台頭し、共和国フィレンツェの実質的な支配者となります。丸い玉を

連ねたメディチ家の紋章。今も豪壮な姿をとどめるメディチ家の館。こうした世俗建築を発達させたのもルネサンスでした。

メディチ家の躍進の基盤をかためたコジモ・デ・メディチ。コジモは死後、フィレンツェ政府から『祖国の父』の称号を送られました。そして孫のロレンツォ・デ・メディチ。通称ロレンツォ・豪華王の時代に全盛期を迎えることになります。このロレンツォ・豪華王は、天才的な外交家であり、また文芸・美術を愛好し、フィレンツェに黄金時代をもたらしました。

このメディチ一族をパトロンとして、青年ボッティチエリは颯爽と画壇に登場したのです。そんなこと也有ってか、初期の代表作品『東方三博士の礼拝』では宗教画に形を借りてメディチ家の集団肖像画にしたてあげています。ここには、コジモ・デ・メディチ。ロレンツォ豪華王。メディチ家ゆかりの大商人。そして右端には、青年ボッティチエリの自画像が書き込まれています。

また『パラスとケンタウロス』…女神アテナパラスがその理性の力で、暴力の象徴ケンタウロスを抑えるこの絵は、一説にはロレンツォ豪華王が単身、船で敵方であるナポリ王と交渉。平和を勝ち取った事を称えた物とだと言われています。

そしてボッティチエリの代表作であるばかりではなくルネサンスを象徴する名作。『春（プリマヴェーラ）』ほの暗いオレンジの園を前に集う多くの登場人物がどんな役割を演じているのかについては、古くからたくさんの解釈がありましたが、1950年代以後、研究家者たちはこの絵の背後に大きな思想的な背景があることを次第に明らかにしてくれています。…新プラトン主義の考えの現れが見られと言うことです。（その説明はここでは、長くなるので省かせてもらいます。）

こうして全盛期を迎えたルネサンスは、フィレンツェの繁栄とともにありました。しかしこうして繁栄を謳歌したフィレンツェ（メディチ家）にも15世紀末に不況の波が押し寄せました。ロレンツォの華やかな外交の陰で、銀行の経営などは他人任せ。ロンドンなどメディチ銀行の有力支店は、次々と閉鎖されたのでした。1492年、無冠の帝王ロレンツォは43才そこそこで世を去ります。世紀末の暗い雲に覆われ出したフィレンツェ。そんな中1494年フランス王シャルル8世がフィレンツェに侵攻して來たのです。これより平和の時代は過ぎ去り。以後16世紀前半まで、イタリヤは動乱の巷と化します。そしてルネサンスも衰退の道をたどったのでした。

そんな時代背景、その絵の解釈等を感じて、美術鑑賞するのもまた楽しいものです。今回は、この位でルネサンス美術についての幕を降ろしたいと思います。

（伊集院 忍 記）

目 次

1994年冬号 1月～3月第12号 ACC-J茨城

幻想の世界（ルネサンス美術）…繁栄と衰退	1
集会報告	4
山行報告	5
北ア笠ヶ岳西落尾根中退 そして広サコ尾根隊と合同山行	6
正月合宿【笠ヶ岳・広サコ尾根】	12
迦多賀岳 隨想	14
松木沢黒沢アイスクライミング	16
変態長の華麗なる登攀を見せつけられた2日間 (東沢ICT)	18
那須朝日岳南稜	22
裏妙義谷急沢	25
小同心右稜・ジョウゴ沢	28
八ヶ岳裏同心ルンゼ(入り口まで)	29
阿弥陀岳北稜	31
赤岳主稜十小同心クラック敗退	32
八ヶ岳ショルダーリッジ右	35
ショルダーリッジ右・無名峰南稜	36
梅コバ沢(氷登り)	37
『大同心ルンゼ大滝』改め 『大同心ルンゼ中滝』氷壁登り	40
94年の氷壁登攀総仕上げ(幽の沢3ルンゼ)	46
谷川岳一・二の中間稜	50
友好山岳団体の月報、会報紹介	52
編集後記	53

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

吉野山

1月15日

出席者 本団、村上、古山、高田

1月19日

出席者 本団、菊地、古山、生井、馬渕

2月 2日

出席者 本団、鯉河、菊地、古山、生井、高田

2月16日

出席者 本団、菊地、古山、生井、村上、高田、馬渕

3月 2日

出席者 本団、菊地、笛沢、古山、生井、村上、高田、庄司、佐藤

3月16日

出席者 本団、笛沢、古山、馬渕、村上、高田、鯉河

3月30日

出席者 本団、古山、菊地、村上、高田、佐藤

山行報告

吉賀会議

*冬期合宿 【北アルプス】

12月30日～1月3日	笠ヶ岳西落尾根	L 生井、佐藤、名雪、仲川
12月31日～1月3日	笠ヶ岳広サコ尾根	L 本団、古山、庄司、馬渕 水島、鯉河、村上
1月 9日	松木 沢 黒沢	L 古山、庄司
1月15～16日	笛吹川乙女ノ沢～ 西のナメ沢	L 本団、古山、高田
1月23日	那須 朝日岳・南稜	L 本団、古山、佐藤
2月 6日	谷急沢	L 本団、古山、生井、庄司
2月10～13日	八ヶ岳(行者小屋ベース)	L 古山、佐藤、庄司、高田 馬渕、名雪、水島
10～13日	①小同心右稜 ②裏同心ルンゼ入り口まで ③ジョウゴ沢F1～F3まで	L 古山、庄司、馬渕 L 名雪、佐藤、高田 L 古山、庄司、馬渕、高田
2月19～20日	①阿弥陀北稜 ②石尊	L 古山、庄司、馬渕、 全員
2月26～27日	①主稜(北峰リッジ) ②小同心クラック取り付きまで	L 生井、古山、庄司、名雪 全員
3月 5～6日	①ショルダーの右 ②無名峰南稜	L 古山、馬渕 全員
3月 6日	松木沢 ウメコバ沢	L 本団、佐藤、庄司
3月13日	大同心ルンゼ(大滝氷登り)	L 本団、生井、古山
3月20日	谷川岳幽ノ沢三ルンゼ	L 本団、生井、
3月20日	谷川岳一・二ノ中間稜	L 高田、古山、佐藤
3月27日	古賀志(岩トレ)	L 古山、庄司、馬渕

北ア、笠ヶ岳西落尾根中退 そして広サコ尾根隊と合流山行

1993.12.30～1994.1.3

パーティ L 生井、佐藤、名雪、仲川

1993年も暮れゆく師走の忙しい中、私と佐藤の二人は一路取手の駅を目指し車を飛ばしていた。本来ならここにもう一人、『高田切り込み隊長』がいる訳だったのだが急に実家から不幸の報があり、今回は涙の辞退にあいなった。

取手の駅で名雪、仲川。二大クライマーを私のスーパービスタに乗せて行く。

(全員荷物が多いので車の中はもう寿司詰め状態で大変だった)

食糧担当の佐藤の仰せで、途中で味噌を買い込み高速に乗り込む。後はひたすら走るのみ、快調に中央道を飛ばし中津川インターで降り国道41号線を高山経由で槍見温泉に入った。槍見に着いた時にはもう夜が明け始めていた。ちょっと仮眠したのち車を停める所を探し、あっちこっちをうろうろしていたら川の所に無料の露天風呂を発見！『おめえこりや、入らなきゃなんめよ』と名雪さん。4人とも早速一番風呂に入る事にする。(山をなめてんなあ？と思いつながらも入ってしまいました。)

お風呂に入ったので眠気は吹っ飛んだが、何かだるい感じだ。車を駐車し、身支度を整え槍見温泉まで歩く。トレールが有りその通りに行く。これよりいざ戦闘開始。

トレールは蒲田川沿いにずっと続いている。クリヤ谷からの沢と合流する所まで来て、おかしいこれじゃ尾根に取り付けない…?と地図を見ながらルートを探すがわからない。仕方なく、ここから大体の見当で登り始める。道無き道をラッセルしながらの登行。散々な登りになった。もう辛い辛い、ほとほといやになったきた。すると突然ぱっと槍見からの登山道(標識の所)に出た。今まで何をやっていたんだろう?と思う。その登山道を少し行き、踊り場の所から西落尾根に向けて尾根に取り付く。

ここからがようやく西落尾根に入れる。また凄い登り。ラッセルは相変わらずだがさっきまでの登りを考えると慣れたものである。かなり登ったなと、高度計(超高級腕時計式高度計)を見ると大体1550m地点まで登って来ていた。時間的に、ここいら辺で幕営しようと言う事になり、今日の行動はここで終え、テントに各自入る。

今夜の夕食は、佐藤料理長の腕前をたっぷり堪能した夕食でした。(とてもおいしい焼肉丼でした。今回は、料理長のお陰でグルメ山行の様でとてもおいしかった)

次ぎの日の朝。今日は広サコ尾根隊が来る。定時交信の時間になり、着いたかなと『J L 1 WNU。こちら 7 K 3 H J F 入感ありますか？どうぞ』と電波を発信すると『はい、有りますよ。メリット 5。H J F 達はどこに車を停めたのかな？どうぞ』『我々は、橋を渡った所にある大きな暖簾の前を左に曲がって直ぐの所ですよ。ところで、下は雪が降ってますか、どうでしょうかね。どうぞ。』『いや、雨になってますよ。雨が降っていますよ、今日は行動出来ないかも知れませんね。そちらはどうするんですか？どうぞ』『我々は今日は錫杖岳をこえて行ける所までですかね。どうぞ』すると『この雨の中、行動するのは山なめてる。こんな雨の中動くと死ぬぞ。我々は今日は行動しないぞ。どうぞ』との声（水島さんのようにだった）『そうですね、でも我々は一応登ってみますよ。どうぞ』等のやり取りをして交信を終えた。

我々は、錫杖岳を目指し雪の中を登行を開始した。急登のラッセルなのでなかなか高度を稼げない。ラッセルを交替で進むが、思うにまかせない。こんな状況で何と仲根隊員が雪中急登を実現する。さすがに雪山経験豊富な彼らの腕が見えた。我々も



急登をラッセルする山岳傭兵部隊

川さんは、傘をさしながら登って行くではないか？（完全に山をなめているのか？それとも余裕の証なのか）我々は、まるで先鋒の傭兵部隊の様に道無き道を行く。体も汗と雪でかなり濡れて来た。標高は1800m辺りまで来たが、このままでは到底たどり着けない。名雪さん等と相談の結果、今回はここから「勇気ある撤退」を決める。下りは降り始めるとあっという間だ。ちょうど昨日のテントサイトまで降りたら、定時交信の時間になった。早速、無線機を出して、広サコ尾根隊と交信する。交信の結果。新穂高のスキー場の所に、屋根のあるテントサイトがあると言うので、そこで今日は幕営しようという事になった。

その場所は何と快適な所。早速テントを張り、中で我々は大乾燥大会を行った。今晚も、佐藤料理長の腕が冴えに冴えておいしいこと。山に来て太って帰ることになりそうだ。私個人としては彼の作った『キムチ』がたいへん気にいった。会社にいる韓国人の船橋さんに食べさせて上げたいほどの絶品であった。

次の日。総勢11名で広サコ尾根を登る事になった。槍見＝8：10に出発したヤッパリ合宿は大勢の方が楽しい。元々私は、この楽しさが好きで山をやっているんだと思う。山も楽しいが、人との交流もまた楽しい。厳しい山行もこんな楽しさが有るから今まで続いているんじゃないかな？私は若い頃から山登りという行為は、単に自己満足でしかないと思っていた。自分なりの楽しさを求めて登るんだと…だから人に指図はされないし、人にも指図しないとそんな風に思っていた。

ベースまでかなりのアップダウンを繰り返し…15：04分に到着。いや疲れた。俺と村上は、皆より少し遅れて、ベースに着いたのは25分はまわっていただろう。そしてしんがりは、水島御大がゆっくりと来られた。

早速、幕営準備に取り掛かる。夕食も済ませ。後は就寝まで話しをしまどろむ。夜もふけ、私は外に出て夜空を見上げていた（本当は小キジだった）外は満天の星が奇麗に輝いていた。今年も良い年で有ります様に。アーメン！と夜空を見上げながら祈る、山岳傭兵部隊の私であった。

次の日は、4時起床。水島さん、鯉河さん、村上の3人を残し、後の8名で笠ヶ岳に登るべくベースを4：50に出発した。クリヤノ頭までラッセルを交替で進む。クリヤノ頭に出る所がちょっと立っていて登るのがしんどかった。ここはルンゼ状になっていて一人ずつ登って行く。

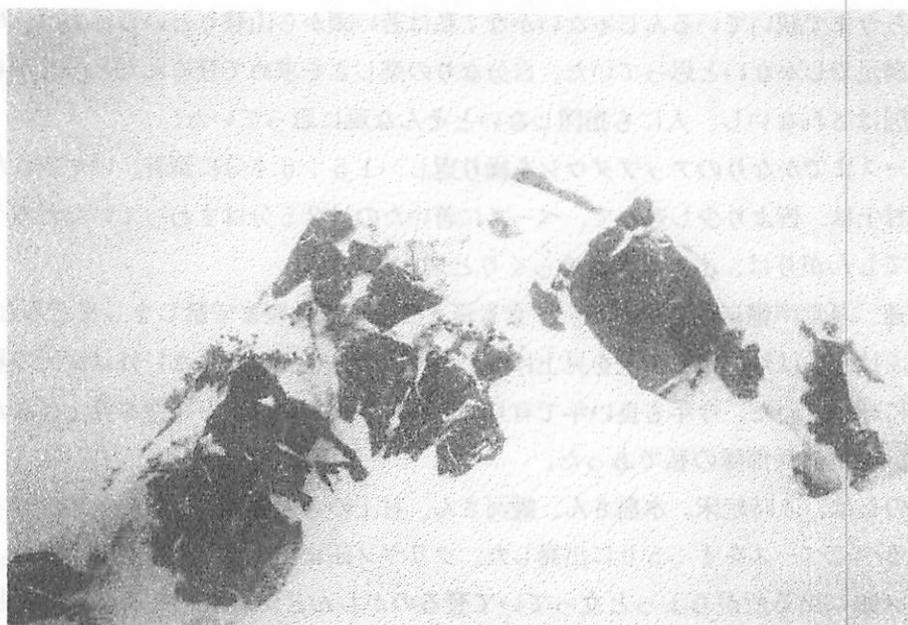
クリヤノ頭に8：36到着。そのまま雷鳥岩を目指し登って行く。私はベースと1時間おきに交信していたが、寒さのため、2時間おきにしてもらう。

天気の方はすっかり悪化。回りはすっかりガスって風雪もひどくなつて來た。それでも行進は續く雷鳥岩を過ぎ、だんだん状況もひどくなつて來た。『モウ！こんなひどい時に登らなくたって良いじゃなねえかよ、もう！いやだ。ブツブツ』と思って登つて行く。高度計で大体 2525m付近で本団さん、名雪さんが、降りて來た。

『だめだ。降りるぞ、撤退だ！』と…これには、だれも反対者はいない。早々に撤退を決め、下山する。下りに入ると皆さん早い事、早い事。あつと言う間にクリヤノ頭まで降りてしまった。ここで小休止。皆さんテルモスを持っていらしゃつて、どのテルモスの中身がおいしいか？味比べをしていた。

ここまで降りると、かなり風雪もおさまり大分楽である。この先は降りるには、懸垂下降の方がいいので、ここは懸垂下降で順順に降りて行く。後は楽な下りである。

ベースのすぐ上まで来たら、天気の方が一転ピーカンの天気になった。でもここまで降りてきちゃもうだめだ。なんてこった！パンナ・コッタ！。毎回、毎回そうそう登れるわきやないか（さっきまで、いやだ、いやだ～て言ってたのは誰だ。この！）後はベースに戻り、今宵の宴会の準備を始める。（ベース到着 14：55）



クリヤの頭

今夜は、最後の宴会なので、盛大に行う。山談義やら、世間話いやら、いろいろな話で宴は盛り上がっていく。この一時が合宿で一番楽しい訳である。

それぞれの思いがこもった合宿もこうして終わりを迎えようとしている。明日は下山し一風呂浴びて、一路茨城を目指し帰途に着く。何はともあれ今回の冬季合宿も無事終了した。

あっと！最後に今回の山行は登頂出来ず、残念でしたがその代わりにちょっとした日の保養もありました。それは下山してから、無料の露天風呂（混浴？）に入った時の事です。何とそこには、全裸の天女が入っていました。天真爛漫に戯れるその姿は、この世のものとは思われない程素晴らしいものでした。思わず私事レンプラント生井はその姿をキャンバスに収めたいなあという衝動にかられました。もしその絵画に題をつけるとすると『天女のまどろむ風景』なんて題になるのかな？ともかく『今年は春から縁起がいいわい！』と一言いいまして今回の山行報告とさせて戴きます。

12月30日 登り始め地(9:20)一踊り場(11:30)－1550地点一幕營地(15:30)

12月31日 記録紛失のため不明

1月1日 槍見 (8:11)－岩小屋(10:40)－広サコ尾根上(13:05)－ベース(15:04)

2日 ベース(4:50)－クリヤの頭(8:36)－引き返し点2525m(10:31)－
ベース(14:55)

3日 ベース(8:24)－槍見(11:00頃)

(レンプラント生井 記)

タカネスミレ



図5 タカネスミレ



全員集合！（ベースにて）



正月合宿 [笠ヶ岳・広サコ尾根]

1993. 12. 31 ~ 1994. 1. 3

パーティ L 本団、古山、馬渕、庄司、水島、鯉河、村上

一日目

去年の正月合宿は晴天続きの最高の山だったのに、今年は、というと初日から雨。車中で停滯していた我々はともかく、行動した先発隊の方々はパンツまでぬれしぐつたそうです。そんな感じでその夜はふもとのキャンプ場で一泊しました。

二日目

川端の露天風呂をよこぎって登山口へ。その後テン場まで延々と、ただただ、ひたすら歩くだけ。僕はまだ雪道に慣れていないのか、踏み後をボコボコ踏み抜いてしまう。右足を一步踏み出すと、腰まで雪の中にズブズブ。そんなことの繰り返しで、バテバテでした。

三日目

笠ヶ岳へ頂上アタックの日。暗いうちからヘッドライトを点けて出発する。トレールがないため皆順番でラッセル。氷点下の野外で汗だくになりながらの運動は、形容しがたいものがある。やっとこ樹林帯を抜け、ワカンからアイゼンに履き替える。が、なんだか天候が思わしくない。それでも我が一行は山頂へ。でも、やっぱり時間的に無理かな・・・。となんやかんやで結局断念。今年はピークを踏めませんでした。

四日目

一昨日登って来た道を今日は折り返し下る。アップダウンが激しいルートなので下りでもきつい。みんなで『露天風呂～。露天風呂～。』と、お経のようにつぶやきながら歩く。実際、お風呂はとっても気持ちよかった。今回一番記憶に残ったのはやっぱりお風呂かなあ。（その露天風呂で一波乱有ったのだが、倫理上検閲に引っかかりそうなので書かない。）

(馬渕 記)



庄サコ尾根を登る



ちょっとバテ気味の馬渕

迦多賀岳 隨想

1993.12.31～1994.1.3

パーティ L 本団、古山、庄司、馬渕（アタック隊）

大の木水島、鯉河、村上（ベース・キーパー隊）

晩春のある月夜に、月の光に照らされながら風に吹かれ海の様にさざめく麦の穂波を見るとき、或いは、初夏の街路樹がつくり出す、光と影のコントラストにある種の苛立ちと言おうか、焦燥感を覚えるとき、私の脳裏を掠めるのは、例えばはじめて山での感動を与えて呉れた剣の威容であり、またはこの世の果ての様な何の生命のかけらも見い出せないただ荒漠とした雪原の風景である。凍てつく様な大気に身を晒し、思考を停止させる様な自然の恐怖に溢れた景色の前にただ呆然と立ち尽くす、そんな非日常的な経験を為す事により、永々と繰り返す日々の戦いへの活力が沸き出づるのかも知れない。



1回敗退の人々と0回敗退の人々

グレーの空から舞い降りてくるたくさんの結晶が、私達のテントに静かに静かに降り積もってゆく、それはまるで

『太郎の屋根に雪の降り積む

次郎の屋根に雪の降り積む』

の世界であり、テントから洩れるランタンの明るさもまた、私の小さな生命をこの大自然の厳しさから守りたもう、愛しきものなのである。

また、沈黙しながら、諸先輩の語る様々な話しを聞き、のんびりと冬山の一日を雪溶かしとお茶作りに過ごすこと、これもなかなかよいものなのである。

そして、下山の日には快晴となりて、槍から大喰・中・南・大キレット・北穂・涸沢・奥穂・西穂と、すべての山々が我々のまた来る日を待っている事を約束して見守って呉れるというのは、何という素晴らしいことであろうか。

以前にガスの沸き出する滝谷を北穂から見下ろして、『ああ、なる程、これがあの鳥も通わぬ滝谷か！』と眺めた事があったが、今回西側より眺めた滝谷は全く陰惨な所なく、妙に明るく見えたのは、やはり、これで無事に冬山から帰れるという安堵の気持ちがあったためだろうか…。

山では、今夜も風が吹いている事だろうか

(村上 記)



や人の悲劇回りや人の喜劇回り

松木沢 黒沢アイスクライミング

1994. 1. 9

パーティ L 古山、庄司

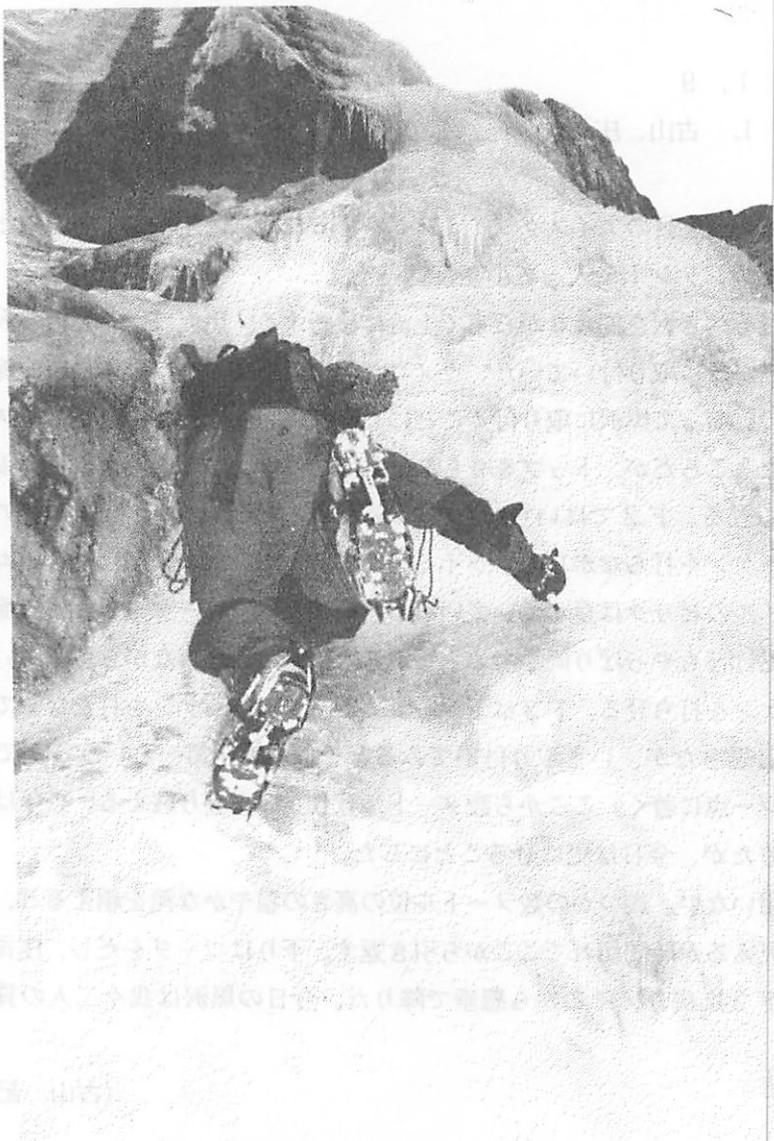
今シーズン二度目のアイスクライミングをするために、松木沢に向かった。ゲート前で車をとめ、テントに入って小宴後就寝。

翌朝、登るべき沢を探しながら車で上流に移動する。黒沢のすぐ上流の沢に多数のクライマーが既に取り付いていた。ウメコバ沢まで移動したが、入り口の滝が凍っていないので、戻って黒沢に取り付くことにした。黒沢には去年の今頃アイスクライミングに来たところだが、トップをやらなければならないのでいつもより緊張する。F1は難無く登る。F2ではいちばん右のルートを、ライニングビレーのアイスクリューハーケンを打ちながらのクライミングになった。氷の状態は良く、両手のピッケル、バイルのピックは良く効いているし、スクリューハーケンも片手で簡単に打ち込める。だけどもやっぱり両手でぶら下がるのにはいつも事ながら勇気がいる。3本ほどハーケンを打ち登る。F3は下から眺めた時にはハーケンを打たなくとも大丈夫かなあ…と思ったが、いざ取り付いてみるとやはり安全第一ということで一本だけ打ってビレ一点に着く。ここから数メートル登りF3を登り終える。去年はここから懸垂で降りたが、今日は更に登ることにした。

ロープは用いない。幾つかの数メートル位の高さの穏やかな滝を越えると、比較的大きな滝が見えるが時間切れでここから引き返す。下りはロープをだし、庄司君を確保しながらF3迄戻り、そこから懸垂で降りた。今日の黒沢は我々二人の貸し切りであった。

(古山 記)

山古の登り方



黒沢を登る古山

変態長の華麗なる登攀を見せつけられた2日間
(東沢 I C T)

1994.1.15~16

パーティ L 高田暢年、吉山正文、本図一統

15日晴れ。早朝、人夫らしき人がこの駐車場は工事中なので車を移動しろと言つてきた。すぐ近くの別の駐車場に移すと、そこにはBGM、暖房付の素晴らしいトイレがあった。朝からあわただしい思いをしてしまった。あとは勝手知ったる道を歩いて行くのだが、酒の詰まったザックはあんがい肩にくる。乙女の沢対岸に幕営地を求めるが、雪を払うと大きな石がゴロゴロしていて、決まるまで随分と時間を浪費した。物の本によると東京近郊のアイスゲレンゲで人気No.1だそうだが、我々以外4人連れの1パーティだけで、かなりの混雑を予想していた私はちょっと拍子抜けした。

登攀準備をしていると単独行の人がやって来た。みると女性ではないか。うーん美しい、俺好みだ。顔を覗き込むと目と目が合ってしまった。すると「本図さんですよね」「ハイ、そうですが」「こんにちは」あれまー菅沼さんじゃん、どうりで美しいはずだ。彼女は“週行クラブ神奈川”的代表で、ここだけの話だけど実は彼女と俺は深い仲



乙女の沢 80m滝をリードする古山

なのよ。なんてことはまったくないが、関東沢屋交流会のメンバーの1人である。単独で釜の沢に入るという。恐らく上はラッセルが深いだろう。「もし、やんなつたらここまで戻ってきなよ、俺たち明日までいるから」と声をかけて別れた。もし戻ってきたら装備をやり繰りして一緒に登ろうと考えていたのだが、彼女は戻って来なかつた。

さて乙女の滝（50m）の登攀にかかる。すでに取り付いているパーティの装備は今で言えばかなり旧式の物で、苦労しながら登っている。そのわきを茨城が生んだ変態クライマー古山が最新鋭のアックス類を駆使し登り出す。その雄姿はまさしく在りし日のガストン・レピュファを彷彿とさせる、天と地の間の華麗なる舞いであった。

そこに居た全員が餌を欲しがる雀の子みたいに大きな口を開けてみとれる中、あっと言う間に登り切ってしまった。俺は今の今まで登攀の上手下手は顔の良し悪しに比例すると思っていた。だからクラブで一番顔の良い俺が登攀でも一番上手だと思っていた。でも最近の様子をみていると、どうみても俺が一番下手だ。あっそうか！ 最近は変ったんだ。反比例になったんだ。納得、これで難問が解決した。しかしイワナ釣りだけはまだ顔に比例しているようである。さて古山に続いて俺と高田が行く。ここでとんでもないことが起きた。それは高田がバイルで俺のザイルを切ってしまった。



乙女の滝F1を登る
ちょっと顔がひきつっている高田

たのだ。高田には正式に弁償するよう申し込んだが3ヵ月たった今もなんら返答がない。高田は当会の現チーフリーダーである。チーフリーダーがこの様な無責任な態度をとつて良いのか。もう少し様子をみてから本団財閥の顧問弁護士を通じ、裁判所に訴訟を起こすつもりでいる。高田よ、今のうちなら半額で勘弁してやるぞ。よく考えたらどうだ。てなわけで乙女の滝を簡単にクリアー。お隣さんはここで練習しているようだが俺達は上を目指す。しばらくは易しい滝が続き、ノーザイルで行くと見事な滝が見えてくる。登ってみるまで分からなかったが、下から眺めると3段40mと大滝80mがつながって見えるのである。スケールは十分あるものの難度が低いので、実に快適で愉快な登攀だ。トップの古山は、ぐんぐんザイルを延ばすのはいいが、ランニングビレーを取らないので、取るよう、うるさく指示する。自信過剰はいけない。えてして事故というものはこういう時に起きるのである。慎重に行こう。対岸に見える東のナメ沢は日当たりが良いせいであろう、氷の発達はない。そのうち大（中）音響と共にロック雪崩が起きた。登攀は無事終了したが、我々にはまだ戦いが残っている。日没との戦いである。休憩を取る余裕も無く、数回の懸垂下降をして帰幕。そのとき6人パーティが下りていった。今からだとヘッデンで下りるのかあ、と、その人達を見送る。

テントでは酒盛りが始まった。重い思いをしてかつぎ上げた酒が次つぎと空になっていく。古山はそんなでもなかつたようだが、俺と高田はかなり酔っぱらってしまった。特に高田はザイルの事など頭の片隅にもないようで、俺の2倍は飲んだ様子。口もレロレロでチーフリーダーという権威も人格もなくなり、ただの酔っ払いのおじさんであった（実は私も同じだった）。外に出てみると満天の星空で、明日の天気を約束してくれる。菅沼さんはこの寒空の中、1人でビバークしてゐるのかあ、頑張るなあと感心してしまう。当会の女性に爪のアカでも煎じて飲ませてやりたいよ、まったく。16日晴れ。起きると今朝登って来らしい人が休んでおり、話しかけてきた。7人パーティを見かけなかったかと言う。6人パーティなら夕べ下りていった旨話をすると、「今日来るからと言っておいたのになあ」とガッカリした様子で戻って行った。本日は西のナメ沢に行く。出合の少し上の右側（左岸）に練習に手頃な氷瀑があるが上流に向かう。ワイヤーロープのある滝（40m）をアンザイレンしてのぼり、さらに上を目指す。ラッセルを続け稜線直下まで登るも滝はなし。こんなことなら右側の氷瀑で遊ぶんだったと後悔した。あとは出合まで下りテントに帰る。今日も乙女の滝には1パーティが取り付いていた。テント撤収後すぐ帰路につくも、足の短い古山

はスッテンコロリンを繰り返し、かわいそうなくらいだった。でも前よりは頻度が減ったので5cm位は伸びたようだ。足の伸長率は山に行く回数に比例する。これを山行足伸びの法則という。たしか青空農学校2年のとき習った。しかし古山よ親を恨んではいけないぞ。足は短くても頭脳明晰な体をもらったのだからな。とかなんとか言いながら無事駐車場着。中央高速が混んでいるようなので奥多摩経由で帰茨したが、柳沢峠は大変な積雪だった。

短い足ながら古山の素晴らしい登攀を見せつけられた2日間であった。

- 15日 駐車場(9:07)一ベース(12:00)一乙女ノ沢取り付き(12:50)一
80m滝上(15:43)一ベース(17:00)
16日 ベース(9:05)一西のナメ沢出合(9:45)一引き返し点(11:46)一
ベース(13:37)一駐車場(15:37)

(本図記)



西のナメ沢上部はラッセルだけだった

那須連峰朝日岳南稜

(説 春山)

1994. 1. 23

パーティー L 本団一統、古山正文、佐藤文則

前菜にはスキーを、メインには登攀を、デザートは温泉というオーダーで出発した
今回の山行は、私には未知の山域である那須連峰を目指す。

那須と言うのは大阪出身の私でも小さな頃から知っていたと思うほど有名な所で、
何で有名かと言えば温泉である。そして、最近では山の遭難事故でもその名を聞いた。
この山域での登山に対する注意として、標高は低いが、風が強く、又気温も低い
のでなめてはいけないとよく言われるようである。又、茶臼岳周辺では凍った斜面でのスリップに注意しろとのことである。.

さて、そんな注意を頭に入れて出発。大丸温泉の駐車場に登山届けを出し、車両止めを越えた所でスキーを履く。本団さんからの借り物のスキーは金具も大きく一番小さく合わせたとはいえまだ大きく、佐藤は5~10Mおきにスキーを外しながらの登りとなる。ついに本団さんに危険だからよせと言われ、スキーをデポし、一人で歩いて登る事になる。 本団さん、古山さんの二人がスキーで先行し、佐藤が後から歩いて行くという形でしばらく行くと林道と登山道は別れ、当然佐藤は登山道を行き、今度は佐藤が先行していると、雪がなくなって来た。林道は風に飛ばされるのか雪がないか、あってもうっすらとしかないのである。それでも二人はスキーで頑張りロープウェイ乗り場につき、まだ履いたまま行くと言う。三人そろってしばらく行くと踏み跡とスキーの跡がまた別れる。再び二人と一人に別れ取り付きを目指す。

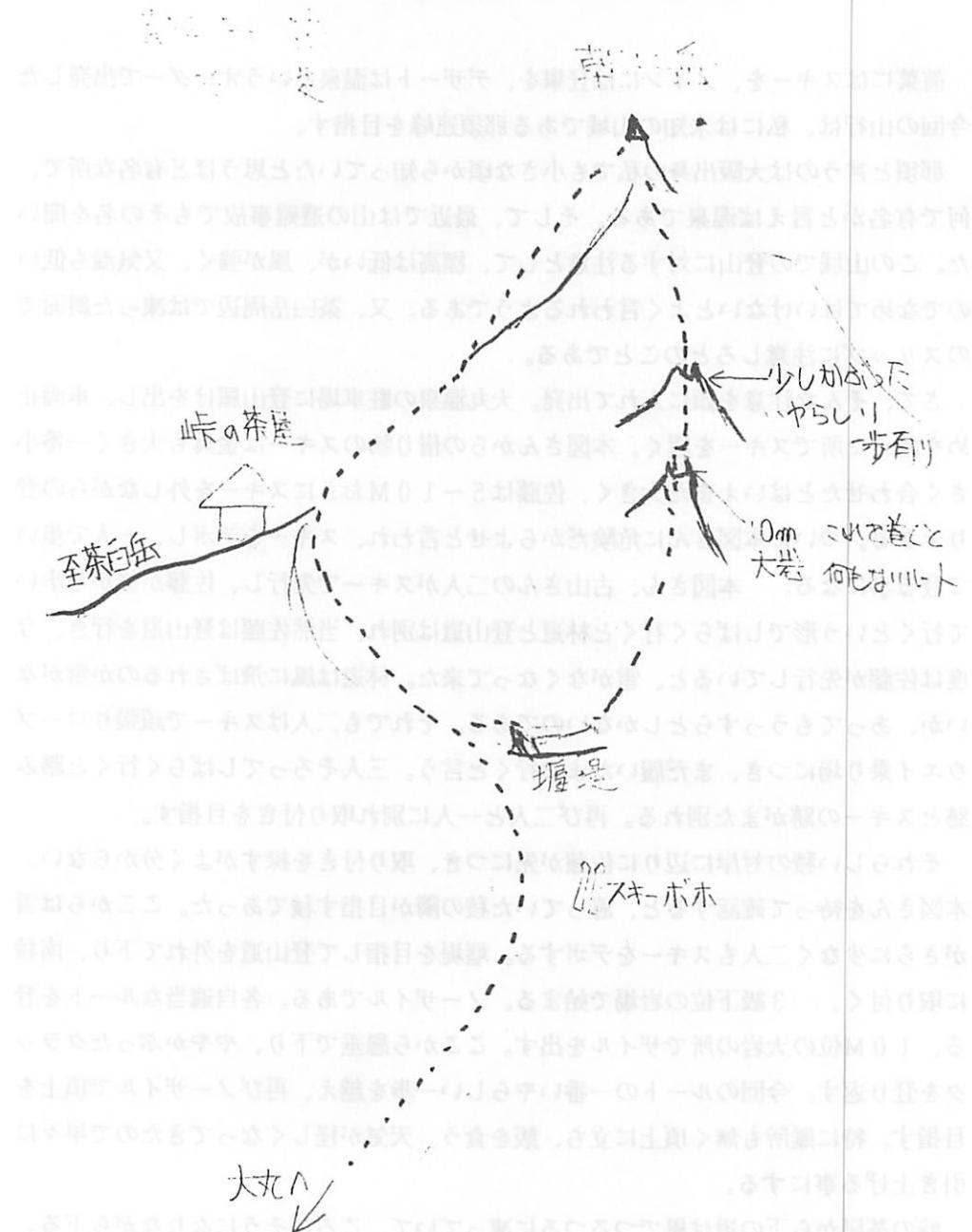
それらしい稜の対岸に辺りに佐藤が先につき、取り付きを探すがよく分からない。本団さんを待つて確認すると、思っていた稜の隣が目指す稜であった。ここからは雪がさらに少なく二人もスキーをデポする。堰堤を目指して登山道を外れて下り、南稜に取り付く。 3級下位の岩場で始まる。ノーザイルである。各自適当なルートを登る。10M位の大岩の所でザイルを出す。ここから懸垂で下り、ややかぶったクラックを登り返す。今回のルートの一番いやらしい一步を越え、再びノーザイルで頂上を目指す。特に難所も無く頂上に立ち、飯を食う。天気が怪しくなってきたので早々に引き上げる事にする。

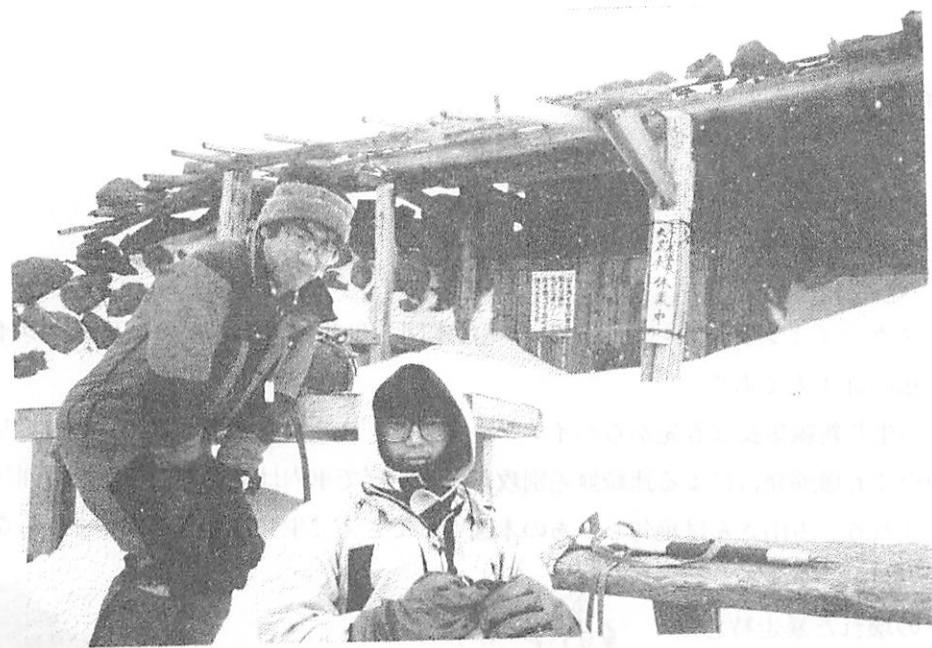
峠の茶屋から下の道は風でつるつるに凍っていて、ころびそうになりながら下る。

スキーを回収し本図さんのみ滑って下る。

新南岳日曜山頂駆除圖

(佐藤 記)





峰の茶屋にて



朝日岳頂上にて。.. 本図

裏妙義谷急沢

1994. 2. 6

パーティ L 本図、古山、生井、庄司

アイスクライミングにいった。メンバーは本図、生井、古山さんの超高級クライマー十私の計4人である。

今年の生井新編集長は春先からハイテンションだ。R 50を疾走するスーパークリカ号の中でも爆弾発言による連続無差別攻撃のおかげで車内は終始なごやかな雰囲気につつまれる。古山さんは絶句し、あの本図さんでさえ『生井はもうどうしようもない』とさじを投げる。ブレーキの壊れた暴走特急生井号を止める事はもう誰にも出来ないのか。

碓井バイパスから枝道に入り仮眠を取る。古山さんと私は外でテントを張り休んだ。翌日、いよいよ沢に入る。F1は入山し川を渡ってすぐである。緊張しながらもなんとか通過、そしてF2、30mである。ここでザイルを出してもらった。たしか古山さん?がトップを行き、私もセカンドで登らせてもらう。

F3～F5はノーザイルである。それからナメが暫く続き、そしてついに核心のF6 (W+V) が姿を現



F6をリードする古山

す。先に3人取り付いており、まずは見学待ちである。下から見ても私には難易度が判断出来ないが、先人の苦労している姿を見ればかなりの所だと判る。

3人パーティが登りきり、いよいよ我らが切り込み隊長古山さんの出番である。確実にランナーを取りながら古山さんは行く。それは見ていて安心できるものだった。10m垂直の8m位まで『疲れたー』と言って古山さんはバイルにフィフィを付けて休みを取った。

そして暫くたって信じられない事が起きた。バイルが抜け古山さんが落ちたのだ。同時にビレーの私のザイルにもテンションがかかり決死の覚悟で止めようとする。

『ワオー』。生井さんもすかさず助太刀にきてくれた。数秒たってザイルが止まったのを確認し古山さんを見る。なんと！古山さんは無傷である。まぬけな私は、前氷壁に投げ出された際ひざを打ってしまった。落ちた古山さんは『大丈夫だよー。』と言っていたのに、ビレーの私が逆に『イテ。』と叫んでいたので後でみんなに笑われた。

不屈の男古山さんは本団さんにバイルを借りその地点から再チャレンジ、疲れも後遺症も見せずについに登り切った。

『こういう所は休むと疲れっから一気に登った方がいいんだ。』と本団さんは言って取り付く。それは信じられないスピードだった。本当にあっと言う間に登り切ったので驚いた。



F6をフォローする生井と庄司

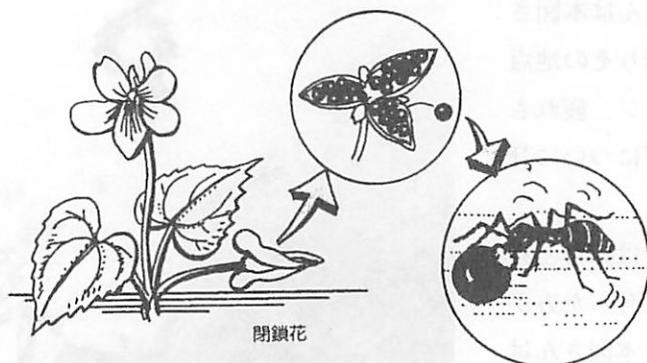
生井さんは名刀正宗？を持って登る。古山さんがみかねて『バイル貸しますよ。』と言ったが断った。生井さんには『道具で登るんじゃない、技術とガツで、登るんだ。』というポリシーが有る為だ。途中ランナーも回収して登り切った。

そして私である。空荷の上ランナーも無し、という恵まれた状況を作つてもらいまずは感謝である。取り付いてすぐ、みかけよりもものすごく難しい事が分かった。氷壁が面でなく、ヒダ状になっているのがいやらしかった。こんなとこをトップで、しかも2連続で登った古山さんは果てしなく偉い。最後は力尽きてしまい本団さんに引っ張り上げてもらった形になった。

その後谷急山頂上につきホッとしたのも束の間、新の核心は下りの大岩尾根にあつた。下山口に松井田山岳会による『この道は一般路ではないので一般人は通らない様に』と言う看板を見てびびってしまった。実際のルートも高度感があるやせ尾根で恐怖だった。バックの本団さんにあきれられ叱られながら下るがこっちは必死で耳にもよく入らない。なんとかしようとするが恐怖心のほうが大きい。下山のおりにはゴミと一緒に必ず反省材料を持ち帰れる私であった。

2月6日 車(9:00)一大滝上(13:20)一谷急山(14:40~15:00)一車(16:20)

(庄司 記)



小同心右稜・ジョウゴ沢

(アモロリ入) サムライ洞窟スキー

1994. 2. 10 ~ 2. 13

パーティ L 古山、庄司、馬渕

一日目、古山さん、庄司さんと小同心右稜に登った。何しろ本チャンは初めてなので、ドキドキという感じだろうか。緊張とともに期待に胸が膨らんでしまった。

ザイル二本で三人を結び、トップを古山さん、セカンドを僕、ラストを庄司さんの順で登って行く。まだまだ未熟ものの私は三人の中で“お客さん”状態である。早く上手になって一人で好きな所へ行けるようになりたい。この日は僕がもつついてしまつたせいか小同心の岩のふもとまでタイムアウト。そこからエスケープルートを下って行者小屋へ戻つて来た。

その晩は水島さん、名雪さん、高田さん、佐藤さんらと合流し大宴会となった。二日目、天候が優れない為、古山さんの提案で急遽氷壁を登ることになった、アイスアックスをもっていない僕も、留守番の名雪さん、佐藤さんから一本ずつ貸してもらうことで仲間に混ぜてもらえた。

まず、F1の1~2m足らずの小さな氷で練習をさせてもらった。人がやっているのを見ると簡単に思えるが、自分でやるとなかなかうまくできない。アイゼンもバイルもなかなか氷に刺さってくれない。刺さったと思っても今度はなかなか抜けない。手があつという間にしごれてばかになってしまった。(チューブの、氷にきちんと刺さった時のききぐあいには感動した。) そしてF2へ。ここは結構たかい滝なのでトップロープを垂らしてもらってのチャレンジとなる。縦には長い氷だが厚さはあまりなく、中は空洞で水がまだ流れている。アイゼンを刺そうと蹴り込むと、ボーンボーンと妙な音がする。四苦八苦しながら(時間も当然かかったが)何とか僕も登りきれたのでよかった。

このF2を登るとき、僕はあまり気づかなかたのだが、だいぶ氷を破壊してしまつたらしい。自分ではアイゼンの爪で登ったつもりでも、実際は薄い氷を蹴破って、階段状に氷を壊しながら登つてしまつたらしい。確かに、降りて来て自分の登った後を見るとところどころ穴ぼこが空いている。高田さんの『ひでえーなあー。』というつぶやきに赤面してしまった。

(馬渕 記)

八ヶ岳裏同心ルンゼ（入り口まで）

1994. 2. 11

パーティ L 名雪，佐藤，高田

まず最初に、このページはとても記録とは程遠いものです。こんなのは山行とはいえないと思うのですが、しょうがありません新編集長の命令ですから。ですからここは飛ばして他の記録を読んでから、その後暇で暇でしょうがないときに（例えは雨で山行が中止になった時とか）読んで下さい。きっと読み終わった時あなたは読まなきゃよかったと思うでしょう。

2月11日～13日と八ヶ岳の行者小屋にベースを張ることにする。古山さん、庄司、馬渕の3名は10日より入っている。この日は小同心右稜を登っているはずだ。この日は大変天気も良く、全国的に3連休の所が多いみたいで美濃戸山荘の駐車場は車と登山者でいっぱいである。我々もぼちぼち準備をして出掛けることにする。

テント、食料、及び炊飯道具は古山パーティが持ち上げてくれているので、我々は個人装備だけである。（それでも行者小屋まで行くのに結構ばててしまった）

行者小屋に着くとまずテントを探しその脇に東京のテントを張る。さすがにテント場もいろいろなテントで、埋め尽くされている。

水島さんをテントに残し出発。中山乗っ越しから赤岳鉱泉へと下る。ココノ斜面で関西方面の岳連の人達が雪上訓練をやっていた。古山パーティは予定どおり小同心右稜ルートに取り付いているらしいがかなりラッセルで苦労しているとの事だ。我々の目標す裏同心ルンゼは他にも人が入っているらしくトレールはばっちりであった。ただ心配なのが氷が雪で埋もれているのでは無いかと言う事である。やがて目の前に大同心の左に伸びる裏同心ルンゼが開ける。予感は的中、ルンゼは雪でばっちり覆われていた。それでもその雪の中をラッセルしながら登っていくパーティが幾つかいた。無線で、古山パーティの様子を伺うと結構ラッセルで苦労しており思うように進んでいない。時間は14時であるが雪に状態等を考え、古山チーフリーダーは後1ピッチを残し涙の敗退、いや勇気ある決断をしたのであった。まあよそのパーティの事はおいといて、我々はというと暫くまどろみながら今後の相談をした結果『せっかく氷を登りに来たのに唯トレールを辿って行くのもつまらない』『来た道をそのまま戻るの

も芸がない』等といろんな意見が出たが結局『隣の尾根に取り付き大同心の基部まで行って大同心稜を下ろう』と言うことになった。結局簡単に考えていたがいざ取り付いてみたらとんでもない木登りルートで途中ザイルを2回も出しました。そんな所でもたもたしてたもんだから、古山パーティの方が先に下りてしまった。

夜は両パーティ共、完登祝いではなく無事合流祝いを盛大に行った。八ヶ岳西面の魅力は何といっても小屋が充実しておりビールが買える事である。それと古山パーティが持ち上げた酒と名雪さんが持ち上げたマグロをタコの刺身、それと水島さんの昔話で宴会は大盛り上がりとなった。結局あとでこの3日間を振り返ると酒を飲んでた記憶しかないがたまにはこんな山行も良いではないか。

*ちなみにこの連休中に東京にも何十年ぶりか大雪が降り帰りも大変でした。

(高田 記)



阿弥陀岳北稜

1994. 2. 19

パーティ L 古山, 庄司, 馬渕

土浦に8時に集合し、一路八ヶ岳に向かう。美濃戸口へは、最後の数百メートルの雪道となりチェーンを装着。そのついでに美濃戸山荘まで頑張って車で行こうとしたが、結局川を渡った直後の右カーブの坂で詰まってしまいしかたなくバス停そばの駐車場に戻る。今回もまた山荘までの車道歩きとなってしまった。駐車場にテントを張り、小宴後就寝。

翌日駐車場を6時頃に出発し、行者小屋に9時頃着く。天気は素晴らしいむしろ日焼けが心配なくらいである。庄司君の高級テントを設営後、登攀の準備をして出発文三朗道と阿弥陀岳への一般道との分岐付近から北稜に取り付く。しっかりとトレールに導かれて樹林帯を進み、雪稜に出る。少し行くと灌木のはえている雪壁を登ると、岩場の貴部に着く。この岩場の左側の雪壁にトレールがついていて、岩場を避けているらしい。我々はここでロープを出して岩登りにかかる。庄司君にビレイしてもらってクラックに取り付く。出だしは少し難しいが、その後は易しい。岩にシューリングをかけビレ体勢に入り、馬渕君、庄司君の順に登ってもらう。2ピッチ目の出だしの岩を登ると数メートル程のナイフリッジを通過し、雪稜に出て終了。この後コンテで雪稜を登り阿弥陀岳頂上に出る。阿弥陀岳に登ったのは久し振りである。頂上で行動食を食べたり、景色を眺めたりして休む。中岳のコルへの下りはロープを出さずに下り、テントに戻る。そしてテント内で、早速宴会になだれ込んだ。

10:00 テント場→13:30 阿弥陀岳山頂

(古山 記)

赤岳主稜十小同心クラック敗退

1994. 2. 26 ~ 2. 27

パーティ L 古山、生井、名雪、庄司

今回のメンバーは国立で名雪御大を加え、最高のクライマー生井さん、最強のクライマー古山さん、一般参加の私と総勢4名となった。私を除いて超高級紳士メンバーが揃い、合宿以外ではなかなか実現しない豪華爛漫な夢の顔合わせである。

今週は私のハツ岳3連週最終回にあたる。

1週目は4日もありながら小同心右稜中退のみの0.5勝、しかし2週目は2日で阿弥陀北稜と石尊稜登頂で一気に2勝と雪辱を晴らした。これもトップで引っ張ってくれた古山さんのお陰だ。大感謝である。また2週とも行動を共にした馬淵くんは山にうつつをぬかし過ぎたあまり今、家庭崩壊の危機にあり3週目は涙の欠場となった。そして3週目、ヤマケイの『日本のクラシックルート』にも載った名門赤岳主稜と難攻不落にみえる小同心クラックに挑むこととなった。そんな大変そうな所へ私ごときが来てしまっていいものだろうか、最大4級だしあくまには身分不相応のではないか、と美濃戸へ向かう車中ですでに顔面硬直気味だ。しかし鬼の古山さんは星一徹の様な顔をして

『主稜では絶対庄ちゃんがトップだからね。必ずトップやらせるかんな』と車内で、あるいはテントの中で、または行者に向かう道すがらに計200回位繰り返し脅し、ただでさえビビっている私に追い打ちをかけた。

『そうだ、今まで俺はセカンドで上げてもらってばかりだった。そろそろトップやんなくちゃダメなんだろうな。今まで脱税してノウノウと生きて来た様なものだもんな。』と私は罪悪感と義務感と悲壮感がほどよくミックスされた心境である。

行者にテントを設営し昼前に出発、地獄へ向かうような重い足どりだ。天候もガスっぽくよくない。文三郎道を進むとすぐに登攀具をつけた女の子と行き会った。

『どこ行って来たの？』と生井さんがすかさず聞く。

『主稜に行って来たんですけど取り付きが分からなくて。引き返してきたんです。』

『ああ、そう。じゃあ俺も一緒におりちゃおうかなあ、おりたいなあ。』と生井さんは本気だか冗談だか分からない様な事を言う。

『ダメですよ！生井さん。行きますよ。』と後の古山さんに追い立てられた。そうな

ると生井さんも後ろ髪を引かれながらも進むほかなかった。

我々はラッセルの必要な赤岳沢をつめずに、文三郎道を最大限に利用して取り付く取り付きの岩は被り気味でいきなりいやな感じだ。今思えば核心はこの取り付けにあったのだ。

悲壮感いっぱいにトップで行く。この時の事が後で『猿まわしの猿』と呼ばれる様になる。生井さんが『右に行け。右に』と叫べば右へ行き、名雪さんが『そうじゃねえ、左へ行け、左に。』と言えば能無しみたいにその通りにしたからだ。そして最後の指令は『降りろ』だったが意に反して落ちてしまった。落ちる私を受け止めようとした生井さんを倒し3m程転がって止まった。生井さんすいませんでした。

『おまえは、もう一度国語の勉強をし直した方がいいな。俺は「落ちろ」じゃなく、「降りろ」と言ったんだかんな。』と名雪さんに言われ散々笑われたが、もう私は笑うどころでは無くパニックである。不幸中の幸いは、生井さんのハンディビデオがバッテリー故障の為撮影されなかつたことだ。生井さんのビデオが機能していたら未来永劫まで笑い者にされるところであり、その事だけは、本当に助かった。

結局1ピッチ目は、生井さんにトップを代わってもらった。華麗に天才クライマー生井さんは登って行く。そしてセカンドで登って行くと、トップあってのセカンド、いまさらながらにセカンドのありがたみがわかる。

2ピッチ目から再び私のトップだ。パニックはおさまったが、まだ極度の緊張状態が続く。ここから必死の登攀が続く。頭の中はカラッポ、ともかく上を、目指すという感じだ。

名雪・古山パーティと並行して進む。慣れないトップに戸惑うが、とるべきルート、確保場所、ランナーの場所についてその都度、アドバイスを受ける事が出来るのが有り難かった。

何ピッチ目だったろう、ようやく赤岳頂上直下に来た。登攀は終わったのだ。私はもう疲労困憊、息をえだえのうえ思考能力ゼロになっていた。

『写真取ってやるから、ハイ、笑って。』と名雪さん。

『ハアハアハア……。』

『おまえもうちょっと楽しそうな顔しろよ。』あまりにボロボロの顔をしていたらしくまた笑われた。

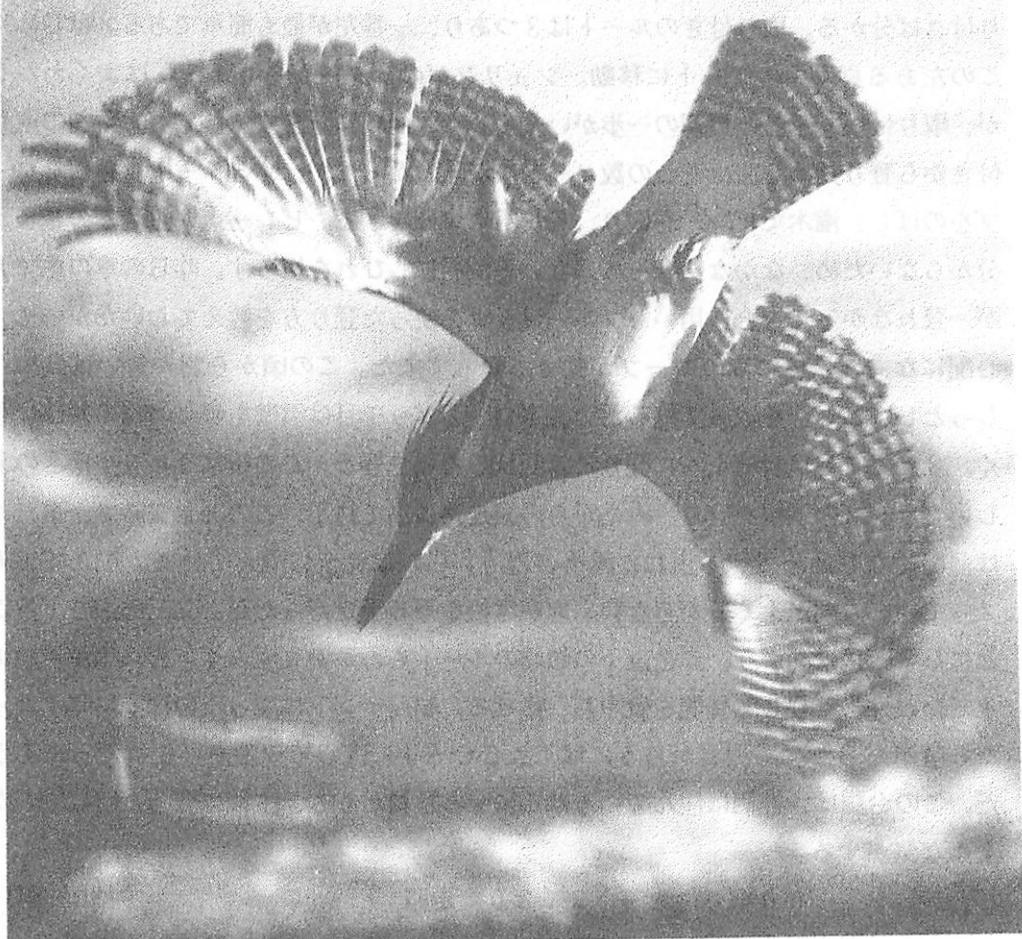
『ハアハア……こんな難しいルートを登ったのは始めてです。ハアハア……』
バカかこいつ、とまたおおいに笑われる羽目となった。いいさらし者である。

こうして八ツ岳3週目にしてようやく赤岳のてっぺんを踏んだ。しかし嬉しくも悲しくもない。思考能力ゼロ状態だからである。

日没も近く、すぐさま文三郎道を下って行った。ヘッドライトは出さずに済んだがテントに戻ったのはすでに6時近くだった。

それからのフィーバーぶりはすごかった。特に生井さんはすさまじかった。その為翌朝、寝坊し出遅れがひびき、小同心クラックは順番待ちのビリとなり、結局敗退となつたほどだった。

(庄司 記)



八ヶ岳 シュルダーリッジ右

1994. 3. 5

パーティ L 古山, 馬渕

八ヶ岳は今シーズンけっこう通った。今回は、ショルダーリッジ右と無名峰南稜を登る予定である。8時に土浦を出発し、12時頃美濃戸着。2月の時にはチェーンを付けたが今回はチェーンを付けずに駐車場についた。ここにも春が近づいているのだ。

朝6時に美濃戸を出発し約50分ほどで美濃戸山荘に着く。いつもの事ながら気の重い車道歩きである。9時頃に行者小屋着。ツエルトを張ってから登攀の準備をして出発。文三郎道を登り途中でトラバースして取り付く。トレールは無いがはつきり取り付きは分かる。取り付きのルートは3つあり、一番左が最も簡単である。はじめにこの左ある真ん中のルートに移動。シュリングのラダーがありルートはよくわかるが、取り付いてみると最初の一歩がいやらしく、簡単に断念する。結局一番右の取り付きから登り始める。出だしの数メートルが難しかったが、45メートル目一杯ロープをのばし、灌木でビレーを取り、馬渕君にコールする。ビレー点から登攀の様子が分からぬいため、なかなか登って来ない馬渕君にしびれを切らす。昨日の車の中で万が一登れなかった場合に用いるブルージックを使った登り方を教えておいたが……、心配になったころに漸くロープが動き、登って来た。この頃から雪が舞いはじめ、じっとしてビレーを取っていると大変寒い。2ピッチ目は雪壁を登り岩峰の基部に着く。3ピッチ目は岩峰を右に回りこみ凹状の岩場を登る。この後は3ピッチほどの易しいミックスの尾根を登り、赤岳からの縦走路に出て終了。このとき5時半、あたりは薄暗くなり始めている上に、風雪の為トレールは完全に消えている。加えて、ガスっていて方向がよく分からない。地蔵尾根を下る予定だったが、文三郎道を下ることにして赤岳に向かう。赤岳直下の鎖場のルートもわかかりずらく、また馬渕君のアイゼンが外れたりして時間を費やし、あせる。結局テントに戻ったのは既に暗くなつた6時半だった。馬渕君が言うには、ACC-Jに入って一番辛い山行だったそうだ。この台詞は、神栖に住んでいるほんにやら社員からも、主稜に登った時に聞いたような気がする。

11:00 取り付き→17:30 縦走路

(古山 記)

ショルダーリッジ右・無名峰南稜

1994.3.5~3.6

パーティ L 古山、馬渕

山行記録とは直接関係ないのだが、本人のいないところで“馬渕家崩壊説”がささやかれているらしい。そこで、失礼とは思いつつも少し弁解をさせていただきたい。

事の発端は兄弟ケンカである。わが家では洗濯は姉さんの仕事である。よって、山に行く→洗濯が増える→姉さんの仕事が増える、となる。このまえ山に出掛ける直前に・・・・姉『最近、山ばっかりいって、グチグチ ブツブツ 洗濯物が、ガミガミ』私『おれの勝手だろう!』二人で騒ぐ。親『うるさい! ケンカをするなら山なんか行くんじゃない。』と相成った訳です。ですから、『山に行くな』のニュアンスが全然違う。過程を省いて、親とケンカをしたなんて喋ったから妙な誤解を招いてしまったのでしょうか。だから全然、全くちっとも心配はないのです。

では本題に。今回も古山さんにおんぶにだっこの誠に“情けない”山行になってしましました。でも、情けないのは僕だけで、山も景色もとってもよかったです。

一日目はショルダーリッジの右。『馬渕じゃ、きついかもよ。』といわれていたのでビビリながら行ったですが、実際に難しくって、半分泣きながら登りました。取り付きの最初からモタモタしてしまい、そこだけで15~30分も時間をかけてしました。何て言うのか、僕が岩を登るという場合、今足をかけているホールドから次の足場へ体重を移すというとき、怖くってなかなか移れないんです。要するに、今とっている姿勢がきつくなって岩からはがれそうになるまで、次ぎのムーブに移る勇気がない。だから時間も体力もかなり消費する割に歩みは遅遅として進まない。途中で日は暮れてくるし、アイゼンもはずれるし、なんだかとってもしんどい事が多かったです。

二日目は無名峰南稜。昨日のことが頭に残っていたのか、途中で古山さんに『疲れた』とか『帰ろう』とかだたをこねてしまった。(我ながら恥ずかしい。) このルートは上部岩壁の最後に一寸したクラックがあるのだが、ここで落ちてしまいました。今までズリズリッと滑り落ちたことはあったのだが、“落ちた!”という感じで落ちたことはなかったので焦ってしまった。(後で古山さんに聞いたらあんまりテンションはかからなかった、とのことですけど)

(馬渕 記)

梅コバ沢（氷登り）

對南軽音無・吉村アリ一級河川

1994.3.6

パーティー L 本図一統、庄司真陸、佐藤文則

0.6-3.6.1988

既製・山古一月トモト

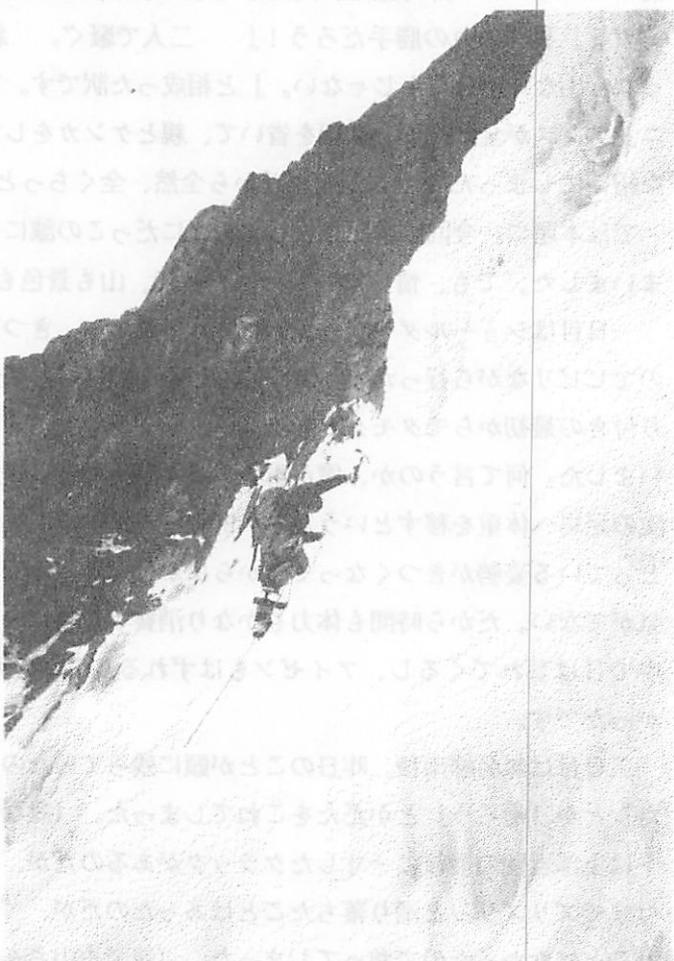
秋になるとよく通われる岩場に足尾山塊の松木沢流域がある、ここはまた、冬の氷登りのゲレンデとしても多くのクライマーが訪れるのである。

今回はこの中の梅コバ沢を氷登りで登攀しようという計画である。

足尾堰堤脇の駐車場で朝を迎えると、工事用の林道を入って行くと、いつも開いているゲートがしまっている。仕方ないので歩いて行くことにして身支度を整え、歩きだそうとして、ゲートの作りをよく見ると何とかなりそうなので挑戦すると、開いちゃったんですよ。開いちゃったもんだからしようがないのでもう一度車に乗って梅コバ沢の対岸まで行く。

雪の付いた15mの滝をフィックスを使って登り、傾斜の落ちた沢沿いをチャンピオン岩稜を左に、中央岩峰を右に見ながら正面の滝を目指す。

夏は40mの滝に取り付く。本図さんの超高級紳士用アイスピッケルを借り、佐藤がトップで行く。中段にバンドがあり、右と左にルートが別れている。右からバンドに上がり、左に抜けて直上するというルートを



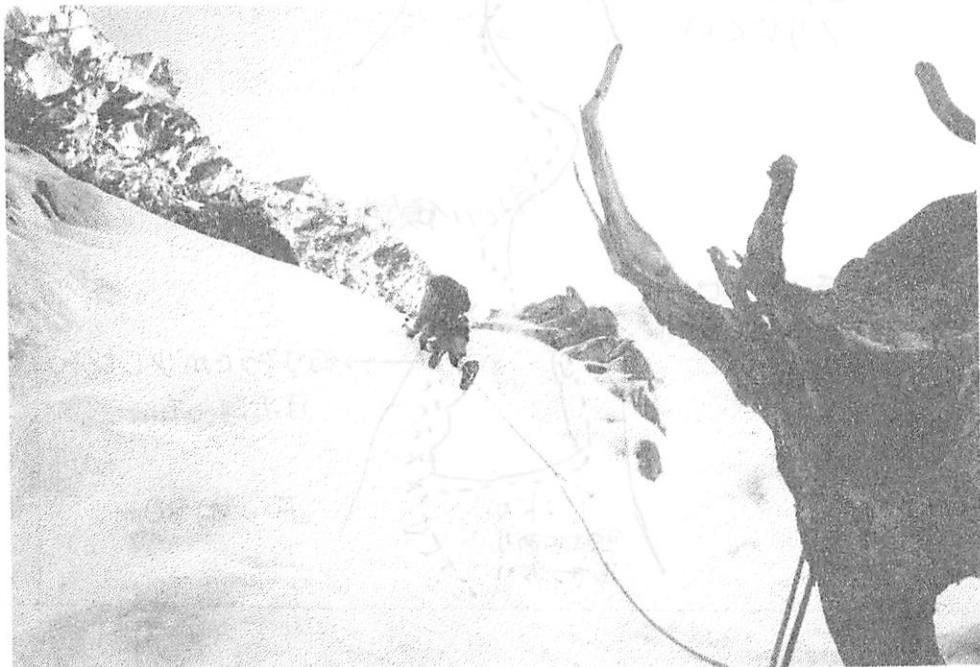
(F7をリードする本図)

頭に描き登りだす。

取り付きの数歩は簡単に上がり、スクリュウを打とうとして、ピッケルに体重を預けようとするが上手く行かず片手でピッケルを握りながら必死で打つ。少しバケツになったようなホールドを辿りバンドまでは何とか速やかに登る。バンドの出だしでもう一本スクリュウを打ち、バンドをトラバース気味に左へ巻くが少し被っていていやらしい。さらにバンドからフェースに出るところで頭がつかえるようになり一歩が出ずには時間がかけてしまう。結局震える足をなだめながらバイルを頼りに垂直のフェースに出る。上のつかえたバンドよりは数倍快適にピッケルとアイゼンを効かして登る。テキスト通りに機械的に手足を動かし小さな凹角にてこずりながらも1ピッチ目を終了する。傾斜の緩い凍った沢筋を少し登り、F2に着く。F1で待ちくたびれた様で本図さんがトップですすると行く。また緩い傾斜となり、小さな滝を登る。少し歩くと又小さな滝が見える、これを庄司さんがトップで行くことにする。緩い滝を7~8m登り、それよりは急な滝を続けて登る。登り終えた所でもう滝はなさうなので懸垂で降りる。

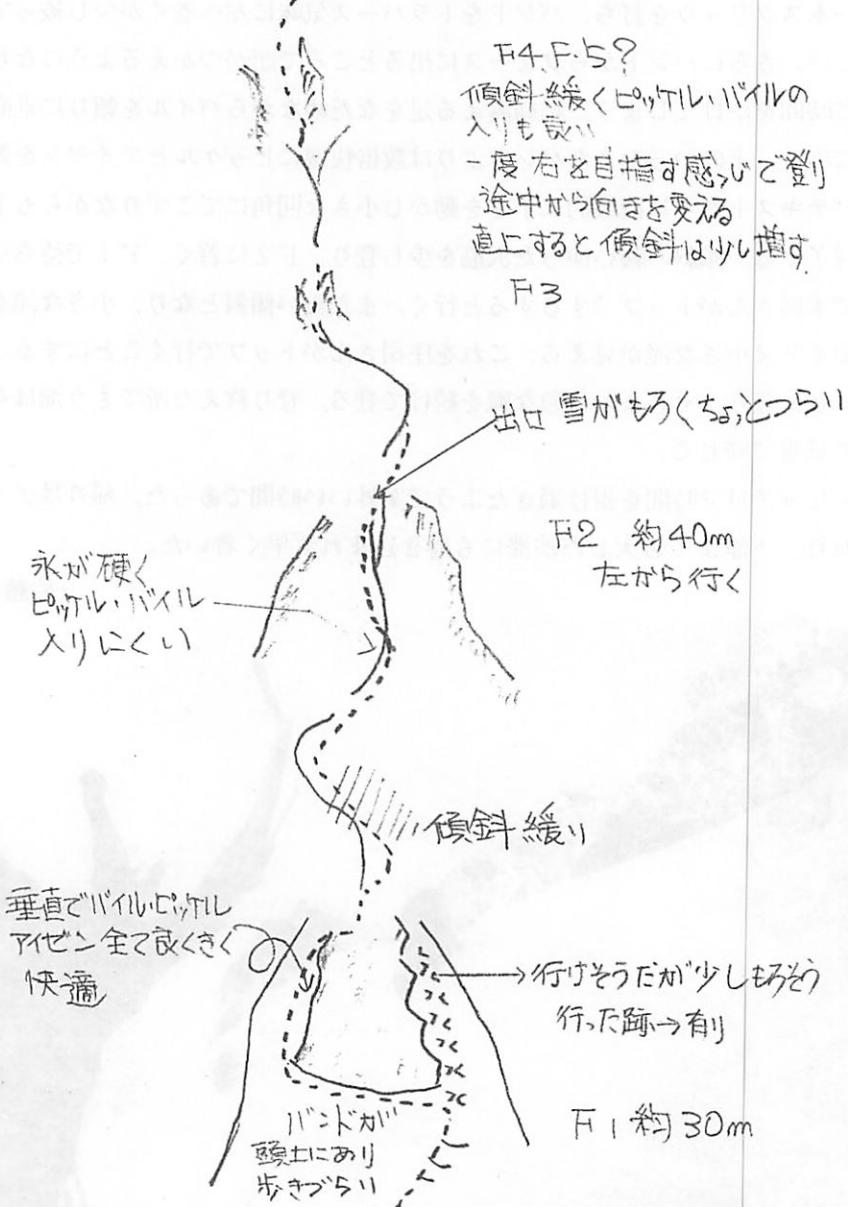
1ピッチ目で時間を掛け過ぎたようで案外いい時間であった。帰りはゲートも開いており、下館までも大した渋滞にも巻き込まれず早く着いた。

(佐藤 記)



上部の氷瀑布をリードする庄司

梅コハミ沢



八ヶ岳=『大同心ルンゼ大滝』改め、

『大同心ルンゼ中滝』氷壁登り

1994.3.13

パーティ L 本図、古山、生井

今まで、生きて来て思うのですが、私は、どうやら何か見えない者に守られている様に感じています。（多分？私が感じるには私の守護神は、摩利支天だと思います）

何故なら、今までに、死線をさまよった時、また何度か私の身が、危なくなる様な時に、いつもどこからか知れない声が、私を救ってくれたからです。そのお陰でこうして生きているのです。（いや生かされているのです）今回の大同心ルンゼの山行でも、そう感じました。では、その山行の話をしてみたいと思います。

いつもの様に、土浦の協同病院の駐車場に集合（pm 8:00）し常磐→首都高→中央と高速を飛ばし、小淵沢で高速を降りて、美濃戸口に到着。ここで、登山届けを出して行き、今回は本図号（デリカ）なので、このまま車で美濃戸山荘まで入れます。お陰で楽ちん、楽ちん。『イヤア！文明の利器だなあ～本当に楽できて有り難いなあ！』と感じました。

ここから先は、かなりハードな雪道なのでドライバーが、自称A級ライセンスをお持ちの本図仙人に替わりました。すると道路の状態が、スゴイ事になっていました。何が凄いのかと言うと、道路の轍が深くえぐれていて、ハンドルが思う様に行かず轍の通りに、左に右に振られてしまって、運転が非常に難しい状態でした。

『凄いなあ！まるでボブスレーの様だなあウワア！ウヒャア！ハンドルを切っても轍通りにしか行かねえぞお～』と余裕の本図さん。しかし我々二人はジェットコースターに、乗ったお客様の様になっていました。（怖いよう！）しかしこれが、これから始まる《あの恐怖事件》のプロローグだとは、思いもしない三人でした。

ボブスレー状態のまま河原まで降りると、すると車が2台停まっていました。

（どうやら、この先の登りが、登れないでここに停めてある様だった？）

私達は、このまま例の急登に向け、車を進めました。デリカの調子は最高！の様でぐんぐん登って行く。『ヤッパ4駆だな、今度買うときは、四輪駆動ダナア』等としながら右カーブを曲がり、いよいよ本日の山場！『心の中では、余裕のよっちゃん』などと思っていると、10m位登った所で、『ウイィーン』とエンジンが鳴り、タイ

ヤが、空回りした。そこで、本図さんがなにやら操作した様に見えた。そして車は、序々にバックし始めた。この時点では、わざとバックさせて態勢を立て直し、登り直すのかな？と私は思っていましたが、どうも様子がおかしい。バックするスピードも加速がついて来た。私は、助手席にいたので、本図さんの顔色が変わって行く姿が、はっきりと分かった。（マジでアブナイ！とそう思った）

車のハンドルを、目一杯きっても、操縦不能。ドンドン滑落スピードは増して行く。モウ！ どうにも止まらない！ 車の中は、パニック、パニック、『ああ、このままでは沢に転落する！ ウワ～神よ、私の守後神！ 摩利支天よ、我を守りたまえ！』と心中で私は叫んだ。すると、その声が届いたのか、車は何かに引っ掛けた様に、それは沢に落ちるギリギリの所で止まった。『奇跡だ！ 守後神！ 摩利支天よ、ありがとう』車の中の三人は、安堵の胸を撫で下ろした。しばらくは、声も出なかった。

『イヤア、よく止まったなあ、15～6メーターは滑ったよな、ハンドルを目一杯きっても全然きかなくてなあ、イヤア怖かったな、やっぱチェーンを巻いてくべ』と本図さん。車は、道路に対して進路をふさぐ様に止まっていた。

早速、チェーンを付ける為に三人とも外に出て作業に取り掛かった。チェーンを取り付ける為に本図さん、古山さんの2名が、タイヤの内側に回り混んでいた。私はと言うと、何と無く例のいや～な胸騒ぎがまだ取れないのが、気になり唯それを見ていた。それを見ていたら頭の中で『もし、ここで車が動き出したら、2人は？』との考えが浮かんだ。すると頭の奥の方から『来るぞ、気を付けろ』と声がした。『何だ、何が、来るんだ』と思って車の先を見た。顔を上げると同時に、何と車（ランクルの様だった）が滑り落ちて来て、デリカに『ガッシャーン』と当たった。それは当たるまで、何の前触れも音も無く起きた。デリカのフロントにまともに当たったから、かなり損傷したと思った。（俺の行く所いつも事件が起きる。報道カメラマンの性か？ それともトラブルメーカーなのか？）

この事件で、一番驚いたのは、本図さん、古山さん、の両名だろう。ちょっとでも当たり所が悪ければ、大惨事になったかもしれない。ともかく警察を呼ぼうと言う話になり、どうにか車を動かし、美濃戸口まで戻った。

駐車場でデリカの損傷を見ると、なんとフロントのプロテクトバーに少々のキズが、有るのみ、それに引き換え相手の車は、ドアがベッコリ凹んでいた。それを見てか、それとも本図さんもあの恐怖の後なので、仏心が出たのか、お互い痛み分けと言う事で話が付いた。（我々がいなければ、あの車は、谷底落ちていたかもしれない）

これから山行なのに、こんなハプニングに、巻き込まれて何と無く先が、思いやられる（決して、私は疫病神じゃないぞ！俺のせいじゃないぞ…）今度は、チェーンを付けたので、余裕で急登もクリア！そして無事駐車場に到着。到着後、いつものアルコールを一杯やり就寝。（例のごとく、古山氏のビバークは、ここでも行われ、千回行にまた一つ近づいた。彼の決意の堅さが伺われた。）

次の朝、大同心ルンゼ大滝を目指し、駐車場を7時10分に出発した。赤岳鉱泉まで快調に飛ばす。（快調にぶっ飛ばしているのは、古山さんだ。やっぱり彼は、ただ者じゃない）そうこうして大滝が、見える所まで登って来たときの事、前方からなにやら、毛色の違う人達が来た。良く見ると、4人連れの外人さんだ。どこの国の人だろう？ブロンドの髪が奇麗だなあと見ていると、『コンニチワ』と挨拶され、私も『こんにちわ』と挨拶を交わした。そして本図さんの所で、『コンニチワ、ドコヘ、イクノデスカ？』と聞いていた、『大同心ルンゼの大滝に行んだ』と本図さんが答えると、『オオー！ダイドウシンルンゼデスカ？ワタシタチ、キノウ、イキマシタ、タキノ、ウエハ、ナダレガ、オキヤスイカラアブナイネ』等々と話しをしていたと思います。私はそれを見ていて、まるで異国に来ている錯覚に陥ってしまいそうになった。

ここから見える大滝は、ちょっと小さく見え、私はもっと大きな滝を想像していたので少々戦意がうせてしまった。そして約2時間で、鉱泉に到着。（ここで、小休止）大同心ルンゼまでもう少し、トレースが有り、楽だなあと思っていたら滝まであと200m位という所まで来たら突然トレール無くなっていて大汗をかきかきラッセルをして大滝到着（10：30）

ひと休止して、身支度をしてまずは、『氷の貴公子』こと古山氏がトップでアタック、ビレーは本図さん、そして私は、報道山岳カメラマンになり『氷の貴公子』を取るべくカメラをスタンバった。貴公子は華麗にパピヨンの様に5mほど登って垂壁の取り付きに立った。そしてスクリューハーケンをセットし、大きくバイルを振りかざし登り始めた。私は、その華麗な舞を見せてくれるのかと、カメラのファインダーごしに見ていた。がしかし2~3m行った所で動きが止まった。どうしたのだろう？少し上がっては下がるといったことを繰り返している。おかしいそんなに難しいのか？そんなこんな事を30分位やっていたが、とうとう力尽きてリタイアというアクシデントがあり、本図さんが『それじゃ、外の者が行けよ』と言ったので『はて？外の者

とはいっていい誰』と言うと『それじゃ、生井行け』との声…聞いてないよ～状態だ。

俺にこんなとこ登れっかなあ。とちょっと頭を過ぎったが、どうもこれは私の推測なのですが、仙人様と貴公子の二人が示し合わせて私をしごいてやろうという作戦だったのかもしれない。でなければ『氷の貴公子』の古山さんが登れない訳がない。

そう思うと俄然闘志が沸いて来る。体に気をこめ、右手に正宗を持ち、いざ出陣しようとした時に、本団さんが武士の情けか？仙人愛用のバイル＆スーパー・ピッケルを借してくれた。お陰で完全武装で（F16トムキャットのミサイル全装状態の様だ）大滝に挑戦出来る。何だか体も軽く感じる（守後神、摩利支天が乗り移った様だ）

こうなると向かうところ敵なしである。ハーケンにランナーを取りダブルアックスで登り始める。立ち込み姿勢を取っていたら下から

『フィフィ持つてのか』と本団さん『持つてますよ』と俺。しかしフィフィを調整していない？どう使うんだべ？と考えてしまった。でもここまで来てからではもう遅い。ええいまよ、俺の場合頭で考えるより、体が動いてくれるからどうにか成るだろう。立ち込んだ状態で左のバイルのリストバンドにフィフィをかけて体をバイルに預けて、といった動きも体が勝手に動いてくれる。そしてスクリューハーケンを打つ。バイルの効きがいいので、バイル一本で十分に安定した姿勢が取れる。そしてまた3m位登ってハーケンを打つといった作業を、計3



大滝をリードする生井

回行って（この滝は登るにつれ被って来る）乗っ越し滝の上に着く。早速ビレー点まで登り『ビレー解除』とコール。そして仙人様よりお借りしたバイル＆スーパー・ピッケルを下に降ろし『登って来て良いですよ』とコールをかける。『行くぞうお』と声がし、本図さんは鬼の様なおっ恐ろしいスピードで登ってくる。ザイルを引くのが間に合わない程の早さ。そのスピードを例えるならそれはF1のレーシングカーのようだった。しかし余りに体を酷使した登りであった為、滝の上に出た時は、さすがに青息吐息だった様に記憶している。（因に6～8分位のタイム）

続いて最後に控えしは『氷の貴公子』こと古山大名人の登場だ。ここからでは彼のカレーのルーの様な？いやもとい、彼の華麗な舞が見られないが、ザイルごしにその舞姿はおおよそ伝わって来る。ビデオに収められないのが残念である。

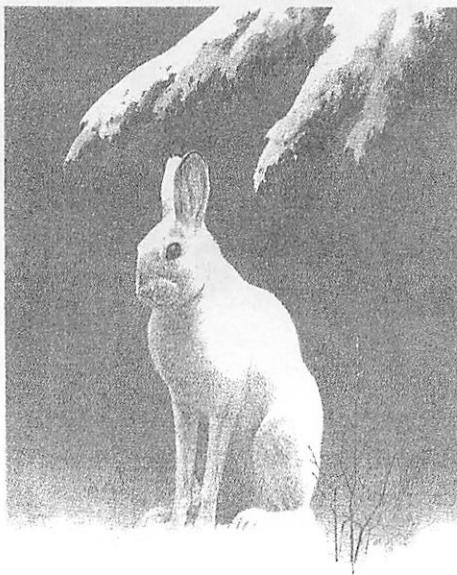
本図さんはここから大同心稜に出るべくザイルを付けたまま先に行った。古山さんが上がって來たので順次、大同心稜に向か歩き始める。大同心稜着（15：00）大同心稜に出て20分程、休息し下降開始。20分位降りたところで左の沢に降りているトレールが有ったのでその通り降りてみる。私は得意の尻セードで一気に降りてしまう。嘘のような早さ（10分位）で下まで降りてしまった。今度からはここを使おうなんてね。そして赤岳鉱泉、美濃戸に16：55着。帰りも昨日の恐怖が忘れられずいる我々は、慎重にまずは安全第一と肝に命じながら帰途に着いたのであった。貴方も恐怖を味わいたいのなら我々と一度山行をしてみませんか。

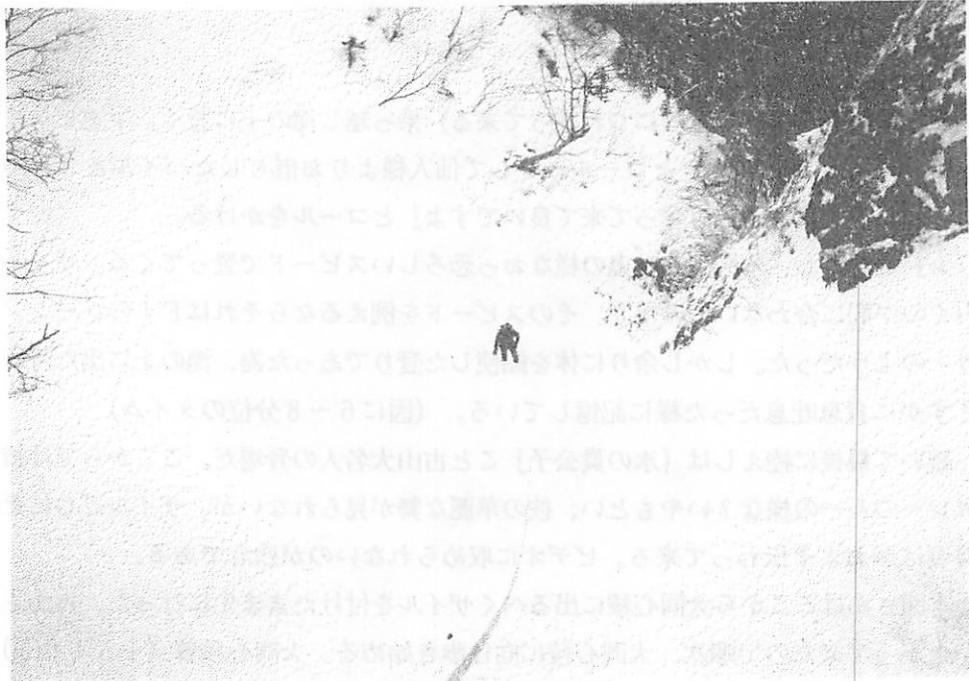
それじゃ、さよなら、サヨナラ、sayonara。

3月13日 美濃戸(7:10)－赤岳鉱泉(9:20～9:30)－大滝下(10:30～11:00)

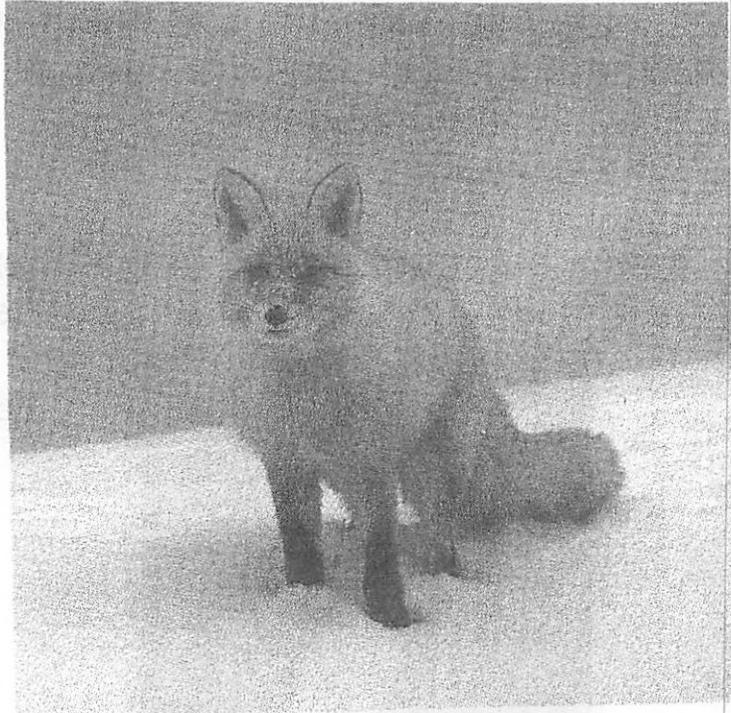
－大同心稜(15:00～15:20)－赤岳鉱泉(16:00)－美濃戸(16:55)

(生井 記)





大滝上はラッセルが待っていた



94の氷壁登攀総仕上げ（幽の沢3ルンゼ）

1994.3.20

パーティ L本団一統、生井一男

まだ真っ暗な中、2人は幽の沢の出合に立った。一ノ倉尾根の上部ではビバークパーティのライトがチカチカしている。今日の登攀で一番注意しなければならないのは雪崩だ。雪崩対策として、なるべく暗いうちに危険地帯を抜けてしまおうと、登山指導センターを3時に出てきたのだ。一ノ倉沢はけっこう人がいるのに幽の沢には我々2人だけだ。昔から幽の沢は静かだった。これはアプローチが長い、冬期は難しいという理由だけではなく、一ノ倉沢と比べると幽の沢の方が雪崩の危険性が高いという理由もある。取り付きを目指す。2人とも無口で、ただ、もくもくと登る。左俣に入ると傾斜が増しラッセルが厳しくなる。生井と交代するが彼はラッセルが下手で、もがいているだけでちっとも進まない。こんな所には一時も居たくないでの、又私が行く。なぜか雪が降っている訳でもないのにチリ雪崩がバンバン来る。壁に突きあたった所の雪を切り開き、2人がやっと立てるテラスを作った。自分でいうのはなんだが、今日は氷壁登攀技術の不安はまったく感じない。はっきり言って取付の氷瀑を見たとき、私はここならフリーソロでも十分登れると思ったほどである。この3ルンゼを登るため今シーズンは今までなく氷壁トレーニングをやってきた。ジョウゴ沢を手初めに乙女ノ沢、西のナメ沢、裏谷急沢、ウメコバ沢、大同心ルンゼと登ってきた。こういった所から今年は氷慣れしていることは事実だ。最近にはないことである。私は近頃あまりトップをしないようにしている。別に自信がないわけではないのだが、年齢を考えてしまうのだ。もしケガでもして新聞紙上を賑わせたら『いい歳して』と言われるのは分かりきっている。今まで山では何回も世間を騒がせてしまつたし、あんな恥をかくのはもういやだ。どうやら私にも見栄というものがあるらしい。でも今日は落ちるという気がしないのでトップをやるつもりだ。というわけで快適な登攀を期待しつつ本団トップで大滝に取付く。大滝は約80メートルほどあり部分的には垂直だが階段状で全体的にはそんなに強い傾斜ではない。登り出すとアクスもよく効き、案の定難しくはない。1P目は30メートルでピッチをきる。2P目、生井が登ってきてそのまま行く。右よりに行きチムニー状の上でビレーするよう指示したが、姿が見えなくなつてからもザイルがどんどん延びる。おかしいなあ、そ

んなに延びるはずがないんだけどな、と思いつつ声をかけると、やっぱりとんでもない右手の岩を登り始めていた。思わず『今日は岩を登りに来たんじゃあんめよ！氷を登りに来たんだっけよ！どこへ行くんだよおめは！』と、どなってしまった。3P目、しかたなくハーケンを1本打って確保してもらい、私が登って行きそのまま45メートルいっぱい延ばす。これで大滝を足下にできた。大滝上は風が強く、新雪が舞ってそれがルンゼに集中してチリ雪崩になっていることがわかった。ここからは雪崩を避けて左端（右岸）に行く。技術的には問題なくただラッセルをしていくだけだが、スタカットで進む。振り返ると石楠花尾根に人がいる。丁度ナイフエッジ辺りを登っていた。結局今日幽の沢に入ったのはこのパーティと我々の2パーティだけだった。雪崩の恐怖から解放されたのは最後の2、3ピッチだった。一ノ倉尾根にとびだすと眼前に一ノ倉沢が広がる。既に天気は下り坂で滝沢リッジを登っているパーティもスピードを上げているようだ。

滝沢リッジを登ったのは何年前だったか。あのときも生井と一緒に、ドーム壁基部のビバークがあまりにもド快適でつい寝過ごしてしまい、後続パーティに起こされたっけ。その時のメンバーにAもいた。しかしAは今、病と戦っている。滝沢リッジのとき、家を出る際、もしものことがあった場合にと遺書めいた物を書き残したと言っていたAを思い出した。Aを一ノ倉で見かける日はもう2度と来ないかもしれない。なにか寂しい思いだが、一番悔しくつらいのはA本人であろう。

登攀用具を片付けていたうちにガスでなにも見えなくなった。視界0となった一ノ倉尾根を登り、一ノ倉岳を経て肩の小屋に向かう。肩の小屋は立派に再建されていて前の面影はまったくなかった。昔なじみの女と久しぶりに再会したら、すごく奇麗になっていたっていう感じ。無線交信で一ノ倉パーティが来るまであと1時間はかかるということなので中で待つことにする。

すると1人の登山者が入ってきた。みると上は雨具を着ているものの下はジーパンである。もちろんピッケル、アイゼンなどはない。どこからか拾ってきたらしい棒切れを杖がわりにしている。外は風が強くガスで天気はよくないのにと思い、話しかけてみると西黒尾根を登ってきたとの事。上の方は滑って危なかったという。あたりまえだと思いながら話していると『今から下るんですか』と聞いてきた。別に、一緒に下りてくださいと頼まれた訳ではないが、顔にはそう書いてあるようにみえたので、『ただピッケルもアイゼンも持っていないねえ人は面倒見切れねえな』と言ってしまった。あとで考えてちょっと冷たかったかなと反省した。でもその人に西黒尾根を



大滝上の雪壁を登る生井



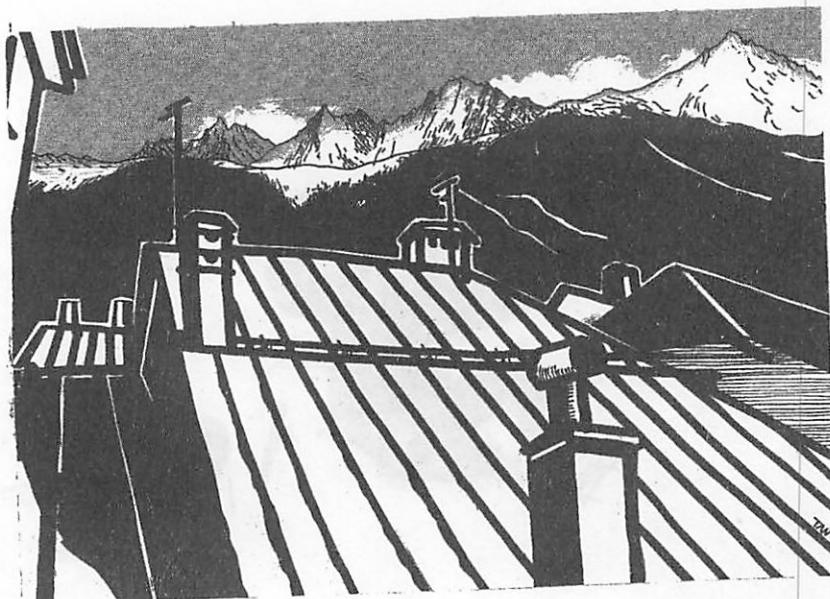
一の倉頂上にて（本図）

下りては危ないから、天神尾根を下りるよう繰り返し話す。その人が出ていってからしばらくの間、このガスの中、降り口がわかったろうかと気掛かりだった。

やがて一ノ倉パーティが到着し、あーじゃない、こーじゃないの登攀談義に花が咲く。奇麗になった昔なじみの女は居心地が良く、後ろ髪を引かれる思いで小屋を出発、西黒尾根を下りる。谷川温泉のユテルメに行くが満員で入れず、諏訪峡温泉に行く。サッパリしたところで水上で酒を買い、奥利根スキー場の駐車場で下山祝いとなつた。

谷川岳指導センター(3:00)——の倉沢出合(3:45)——幽の沢出合(4:25)——
3ルンゼ取付(6:40~7:05)——の倉尾根(12:10~12:45)——の倉岳(13:20)——
肩の小屋(14:40~16:10)——谷川岳指導センター(17:45)

(本図 記)



(図本) アコ土蔵のー

谷川岳一・二の中間稜

1994. 3. 20

パーティ L 高田, 古山, 佐藤

このルートは2年前に行く予定であったが、数日前にギックリ腰になってしまい行けなかった悔しい思い出があるルートなので、何が何でもかたづけたいと思っていた。同じくこの日に幽ノ沢三ルンゼに入る本団さん生井さん達と一緒に出掛ける。両パーティ共基本的には日帰りだが、なにがあるか分からないので車は別々で行く。

2時起きの予定なのでいつもより早く下館を8時に出発し、いつもなら谷川位なら使わない関越自動車道を使い天神ロープウェーの駐車場に12時に着く。すぐに仮眠を取り、なんとなくウトウトしたかと思うともう2時である。早速出発準備にかかる。何年山をやっていてもこの夜行日帰りの朝の出だしまでが一番苦痛な時である。心配した天気もとりあえずは大丈夫そうだ。登山指導センターに計画書を出し、ヘッドライトのあかりを頼りに一の倉の出会いを目指す。この時期にこの道を歩くのは何年か前の東尾根以来である。

一の倉の出会いで三ルンゼパーティと別れ、少し休んだ後一の倉へ入る。多分先日から入ったと思われるパーティのヘッドライトの光が滝沢リッジ、衝立、一の倉尾根から見える。夜が明けるのを今か今かと待っているそんな感じである。

途中ちょっと行き過ぎたが取り付きはすぐ判った。やはり幾つか先行パーティが入っているみたいでトレールがはっきりついていた。暫く尾根どうしに歩きやがて木登りとなる。ここは腕力を使い強引に登るしかない。足並みの揃ったパーティならノーザイルであつというまに登るのだろうが、我々はザイルを出したので結構時間くってしまった。5~6ピッチの長いよいよこのルートのメインであるナイフリッジに到着する。いろいろな記録を読んだり又は人から聞く話では、ここは馬乗り状態で通過しないといけないような、それだけ両側がスッパリ切れ落ちた素晴らしいナイフリッジであるとの事であった。しかし我々が通過したのは先行パーティに完全に踏み固められたスノーリッジであった。ここは難無く通過し、ゆるやかな雪壁を登り東尾根と合流。この頃より天気は下り坂となり視界は悪く風も出て来た。三ルンゼパーティは既に肩の小屋に着き我々を待っている。暗くなるまでに稜線に出ればあとはヘッドライトを照らしても下れる自信はあるが、それでも時間が気がかかる。東尾根に出てか

らは暫く雪稜を登る。トレールはばっちりついているが一の倉沢側がすっぱり切れており（視界が悪く下は見えなかつたが）結構緊張した。そしてこのルートの核心部である第一岩峰に着いた。ここから右に巻けば簡単に抜ける事が出来るが、それではメインディッシュを食べずに、御馳走様をするようなものである。ここは、真正面から勝負を挑むことにする。まずは古山さんが華麗なムーブでまるで蝶が舞うかのようにトップで通過。つぎに私がザイルに身を任せ通過。前に積雪期と無積雪期に二回ここを登っているがその時は結構簡単に登った気がする。岩登りが下手になったのか、それともただ単に記憶が悪いだけなのか、多分両方だろう。第一岩峰を抜けトラバースぎみに雪尻を越え国境稜線へと出る。

ここまで来れば肩の小屋はもうすぐである。小屋に着くと本団さんが小屋の外で待っていてくれた。肩の小屋は最近建て替えられてとても奇麗になっていた。中で少し休み登攀具をかたづけ、すぐに下山を開始する。視界は相変わらず悪く西黒尾根の入り口が判りづらい。ここは経験豊富な本団さんを先頭に下る。おかげでなんとか明るいうちに車の所に着く事が出来た。

一日で登ってしまったので翌日はスキーをしようと言う事になり、とりあえず温泉に入り酒とつまみを買い込み、車を奥利根国際スキー場の駐車場に移動し無事下山を祝い大宴会を催した。

天神ロープウェー駐車場 (3:00) → 一の倉出会い (4:00) →
取り付き (4:40) → 登攀開始 (5:00) → 東尾根合流 (13:00) →
肩の小屋 (14:40) → 天神ロープウェー駐車場 (18:00)

(高田 記)

《友好山岳団体の月報、会報紹介》

ありがとうございました

月 報

◎Rohman NO.105 1994.1 浦和浪漫山岳会

南会津・黒谷川大幽西ノ沢～東ノ沢下降、冬山合宿報告=越後駒ヶ岳・マキグラノツルネ、八海山・大倉登山道ほか

◎Rohman NO.106.1994.2 浦和浪漫山岳会

自戒を込めて、越後・金城山北尾根、上越・日白山ほか

◎Rohman NO.107.1994.3 浦和浪漫山岳会

越後・金城山山スキー、会津・糸沢山～窓明山(山スキー)、北ア・霞沢岳西尾根ほか

◎月報・Z A C NO.149 1994.1 グループ・ゼフィルス

東北・国見台～大深沢源流、梅森～トコロ温泉、李蔵山、下越・大石～梁山泊～葡萄鼻山、信州・高峰温泉～鹿沢温泉、上越・三国スキー場～赤沢スキー場ほか

◎月報・Z A C NO.150 1994.2 グループ・ゼフィルス

谷川・天神尾根～熊穴沢、東北・和賀・高下岳、船形山、吾妻・天元台～中吾妻、会津・転石峠～舟ヶ鼻山ほか

◎月報・Z A C NO.151 1994.3 グループ・ゼフィルス

下越・五百川～栗ヶ岳、信越・志賀高原～野反湖、尾瀬・黒岩山～長須ヶ玉山、会津・大博多山ほか

◎わらじ NO.454 1994.1 わらじの仲間

ある遺稿集、会務報告ほか

◎わらじ NO.455 1994.2 わらじの仲間

城山落石事故、冬山合宿報告=北ア・後立山赤沢岳西尾根、山或記・迷走甲斐駒ヶ岳黒戸尾根、戸隠西岳P4尾根、山の本棚ほか

◎わらじ NO.456 1994.3 わらじの仲間

この頃の事故を憂いて・特にサブ合宿の墜落事故を受けて、新春ハイキング、3連休の山ほか

◎峻嶺 NO.2 1994.1 邑行クラブ神奈川

信越・白砂川本流、下田・五十嵐川鎌倉沢、笠掘川光来出沢、越後・水無川センノ沢、奥秩父入川本流、南ア・雨畑川ギヨウザ、戸栗川寒沢、丹沢・寄沢小屋の沢ほか

◎峻嶺 NO.3 1994.3 邑行クラブ神奈川

越後駒ヶ岳・極楽尾根、奥多摩・丹波川火打石谷、奥秩父・笛吹川東沢釜の沢、裏妙義・谷急沢&裏谷急沢、戸隠P1尾根、丹沢・玄倉川小川谷廊下ほか

会 報

◎フクロウ A5 25P 隠し沢友の会

隠し沢友の会の93年度会報 最新ビパーク技術、早春のX沢、白神・大川、戸隠・裾花川本谷、白神・追良瀬川、頸城・桑取川、谷内川、早出川、和賀川ほか

報告書、資料

◎下山遅延報告 B5 22P 浦和浪漫山岳会

会員3名が会津・窓明山に出かけ、下山が遅れ遭難騒ぎとなつたが、その時の報告書。計画の概要、山行の立案から承認までの経過、行動記録、ビパークについて、入下山連絡の確認から遭難対策本部の活動状況、山岳保険請求手続き、費用見積書、気象の状況などについてまとめられている。

◎遭難対策パンフレット B5 34P 浦和浪漫山岳会

前号で紹介したので省略します。

※ 編集後記

《企画展会 脊日の本山田山秋太》

（おまけ）

編集作業2回目にして、早くもパニック発生！”印刷が出来ないよう～？！次号からが、配本出来なくなるかも？！早急に手を打たねばいけない。やはり新しい印刷所を探さなくては、いけません。印刷を業者に頼むには、今までの会費では、とても、とても、やっていけないと思います。ですのでここに会費の値上げを要求します。何%アップになるかは、印刷所（価格）により変わると想いますので後日、連絡いたしますので、あしからず。

皆様には、ご承諾お願い致します。

（忍）



季報「R&V」第12号 発行1994年冬

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J茨城 〒306-06 茨城県猿島郡猿島町逆井318

生井一男 方

編集者：伊集院 忍